
【抱きしめた季節】

イラリバナナ「市川昭子」

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【抱きしめた季節】

【Nコード】

N0906J

【作者名】

イラリバナナ「市川昭子」

【あらすじ】

外資系の会社に勤務する吉野^{みお}澪は今年28歳になった。

キャリアを積み語学が堪能な澪は海外出張が多かったが、それ以外は日々淡々とした暮らしを送っていた。そんなある日、香港の出張で知り合った同じ会社の社員であるイタリアの青年、マッシモ・ペリオに淡い恋心を抱く。しかし、彼は実家の事情で会社を辞め、イタリアに帰国した。

同僚の話から帰国先は本社のあるパルマだと知った。

偶然にも1ヶ月後には澪も本社パルマへの転勤が決まっていた。

■ 第1章 ■ 出張先の出来事

■ 第1章 ■ 出張先の出来事

空港に降り立った途端、漣の身体から汗がほとばしるように流れ出た。

日本より半月近く早く夏が訪れる香港であるが、東京と比べると気温は高く、

その蒸し暑さは言葉では言い尽くせないほどの不快感をもたらす。

蒸し暑い外気を遮断した港内でしばし休息した吉野漣は、年数回を数える香港出張をこなすため、

慣れた歩調で港内を歩き、いち早く税関を出た。

空港を出ると同時に、再び蒸し暑さに漣は辟易としながらも、持ってきた扇子で顔を煽ぎ、いつものゲート出口で迎えの車を待っていた。

程なくフロントガラスに“吉野様”と日本語と英語で書いた紙を貼った

黒塗りの乗用車がやってきた。いつもの車であった。

ゲート出口には他にも迎えの車を待つ人々がいることから、漣自身も吉野と書いたメモを高く掲げ、迎えの車を手招いた。

込み合う車の間を縫って、漣の前に停車した車から降りて来たドライバーは、

ハンサムな顔立ちの若い青年で、初めて見る顔だった。

お互い簡単な挨拶を交わし、キャリアバッグと共に早々に後部座席に座ったが、

車から降りてきたそのときから、いくらなしか悲しげな彼の目に惹き付けられていた漣は、ドライバー席に座るまで無意識のうちに、

青年の動きを背中越しに注目していた。

しかし、注目の目先は彼の悲しげな目から、彼の着衣の後ろの襟元にぶら下がっている二枚の札へと変わった。

「ジャケットの後ろになにか札らしきものが二枚下がっている…」

漣は思わず声を掛けるともなく声にしようとした。

青年は走り出した車に急ブレーキをかけ、漣を振り返った。

「札が二枚ですか？このジャケットは昨日購入したばかりです。もしかしてプライス！」

初対面ではありながら、とっさのことであつたから、ジャケットの新調を

思わず口にした青年に好感を抱いた漣は、苦笑しながら

「ほらこれよ」

ジャケットの後ろに下がっている札をむしり取り、青年に渡した。

彼の言うように値札であつた。漣の顔を見て恥ずかしそうに

肩をすばめる若者の姿が、哀れっぽくもあり可笑しくもあつた。

漣は値札をつけたままのジャケットを今朝から着ていたであろう彼の今までを想像しながら、笑いを我慢することが出来ず、

思わず吹き出してしまうと、青年も相変わらず恥ずかしそうにしながらも、

漣と歩調を合わせるかのように、笑い出してしまった。

気が付けば、車道の中央近くに止めた車の後方には、

何台もの車が漣たちの車で立ち往生していたため、

抗議のクラクションの渦の中にいた。

香港島に予約したホテルには、空港から三十分足らずで着いた。

キャリーバッグを降ろした青年は、改めてさっきの値札のことでお礼を言い、

今晚の会議開始の時間を笑みもなく、事務的に告げて、そのまま去って行った。

チェックインを済ませ、ボーイの案内で部屋に入ると、オーシャンサイドの景観の良い部屋を選んだつもりが、海も中庭も見渡せない道路際の部屋であった。

部屋替えを申し出ようと思いましたが、今夕は社内のコンペで勝ち取った

自分の企画で始まったプロジェクトの大切な会議がある。

間もなく始まる会議まで、今一度資料を読み通しておかなければならなかったことで、

部屋替えをあきらめ、気を取り直して数時間デスクに向かった。

午後五時、ホテルの向かい側にある香港支店のビルの一室で、会議は定刻通りに始まった。

夕食は会議の後、最上階の展望レストランで友好を深めるために、バイキング形式で行われると聞いている。

会議は順調に進んでいたが、途中、空港に迎えに来た青年が部屋に入ってきた。

そして、澪の隣の席に当然のような顔をして座ったことで、澪の神経が

苛立ち始め、それまでの順調さが崩れ始めた。

澪は油断すると、気になることがあると自問し、目の前のことに集中できなくなる癖があったから、突如として隣に我が物顔で座った青年のことで、もはや会議どころではなくなっていた。

空港に迎えに来た時は、確か眼鏡をかけていたはずだと澪は思い出しながら、

彼はドライバーではなかったの？じゃ、彼は何者？私の横にいるってことは？

どうして私の横なの？私にアドバイスをするため？

澪は苛立ちながらとうとう我慢が出来ずに、青年に向かって小さな声で言った。

「あなたは？さっきのドライバーですよ？今何をしていますか？私には何もしていないように見えますが…。とにかくもう少し離れて頂けますか？気が散って困るの…」

「えっ？ごめんなさい…。近寄りすぎていましたね。離れますが、僕はただここに

座っているわけではありませんから。僕はこの会議の記録係です。仕事をしています」

澪は会議の途中であったが、インターバルを願い出て頭を冷やすことにした。

廊下に出た澪は、たかが青年一人の出現に、なにを焦っているのか、と自分を叱咤しながら、窓辺に映る湾の景観をぼーっと眺めていると、

目の前に清涼飲料水のボトルがそつと差し出された。

第2章に続く

■第2章 ■ 青年の心遣い

■第2章 ■ 青年の心遣い

差し出された清涼飲料水のボトルを受け取っていいのか、迷いながら、

後ろを振り向くと、隣にいた青年がどうぞとうなずきながら立っていた。

そして、三十六階の海辺に面した窓辺に漣と並ぶようにして立った青年は、

「会議の途中、突然のこととはいえ、僕の登場で驚かしてしまいました。」

申し訳ありませんでした…。それともひとつ、空港ではありがとうございました。

初対面から、みつともないところを見せてしまって…。冷や汗ものでした」

そう言つて照れ隠しに窓外を眺めた。そして、一息ついた後、言葉をつなげた。

「それにしても綺麗ですね。吉野さんの爽やかな茜色の洋服。僕は好きです…」

漣の顔を見ないで透き通るような声でそう言った。

慣れない褒め言葉の直球に、思わず顔を赤らめた漣を、

青年は驚きのまなざしで見つめた後、思い出したように言った。

「ああそうだ、自己紹介を忘れていました」

漣は今更と思いながら、怪訝そうな顔をして

「空港で確かあなたから名刺を頂いていますか…」

そう言いながら彼の名詞を探すためにバッグの中を探っていると、青年は漣の手を止めて言った。

「ええ、でも、あれは会社の僕。つまり営業用。それにあなたはその名刺をしっかりと見てはいないでしょう？ 例え見えても僕の名前を覚えてはいないはずです。

誰でもそうです。だって自分のプラスになる人の名前は覚えられても、

雑魚の名前はよほどのことがない限り、覚えませんからね」

「…ごめんなさい」

「だから改めて自己紹介してもいいですか？」

そう言った後、照れ笑いをしながら、窓辺から離れ、漑の前に改めて立った。

「僕の名前はマッシモ・ペリオ。故郷はイタリアのパルマ。

青い目ということとアメリカの南部訛りの英語から、時折アメリカ人に

間違えられます。でも、生粋の北イタリア生まれ。両親も純粋なイタリア人です。

そして、会社では営業という名目で働いていますが、

貴賓やあなたのような重要人物を空港に迎えに行ったり、

支社長のお供で飲みたくないお酒を飲みに行ったり、

大嫌いなカラオケバーで歌わされたり、さつきみたいに記録係をさせられたり、

つまり、雑用を押し付けられる総務屋です。以後お見知りおきを」

自嘲気味に早口で息をもつかずに、一気に喋る彼を見て漑は笑った。マッシモも笑いながら窓辺から離れ、

「もう大丈夫ですね。リラックスできたと思います。

そう思いませんか？会議室に戻りましょう。皆待っています」

漑は彼の話術にまんまとはまったことをそのとき知った。

漑の苛立ちや緊張感を溶かすために、おどけて自己紹介などをした

マツシモという青年にそのとき、初めて好感を持った。

そして、空港から始まっていた青年との出逢いも一段落しかのように、

本来の自分を取り戻し、青年のエスコートで仕事に戻った。

会議終了後の午後7時過ぎ、最上階のレストランでバイキングが始まった。

漣としては退屈極まりない交友のための食事会は、

避けたかったが、これも仕事の内と割り切り、

支社長や部長クラスとたわいのない話をして時間を潰していると、自称、総務屋と形容したマツシモがグラスを手に漣の前に現れた。

「先ほどは失礼を致しました。こんなところでなんですが、

明日、僕は九龍の支店の講習会に出ますので、お会いする時間があります。

ですから明日の予定の打ち合わせをしたいので、今から少しお時間を頂けますか？」

上司が居並ぶところで、先刻のように馴れ馴れしい口調で話せないのを察し、

「わかりました。事務所まで一緒にすればよろしいのですかね？」

漣もかしこまった言葉で返事をし、二人は宴たけなわのレストランを出た。

エレベーターに乗るとマツシモがロビー階のボタンを押したのを見て、

「事務所は15階だと思いますが」

「いいえ、明日の予定はここにプリントしてありますので、別に打ち合わせをしなくても大丈夫です。」

支社長とランチの予定以外、会社で今日の企画会議の続きをして頂ければ、

明日の予定はそんなに詰まったものではありませんから」

漣はまたまたマツシモの心遣いを知った。

漣がつまらなそうに宴会に付き合っている姿を見るに見兼ねて、外に誘い出してくれたのであろうと思った。

彼はそのまま漣をホテルに送るつもりのもりで、道を隔てた向かい側に建つ

漣の予約したホテルに足を向けていた。

しかし、空港からの彼の余韻の中にいた漣は、もう少し話があった。った。

なぜか今を逃したら、後悔するような気がした。

初対面の相手にこんな性急な思いに駆られたのは、久々であったが、勇気を出してマツシモの背中に声を掛けた。

「もし、あなたの時間が良ければ、ホテルの前の港と一緒に散歩してくれませんか？

一度でいいから夜の港を散歩したかったのですが、今までそのチャンスがなかった

のです。香港に慣れているとはいえ、夜の一人歩きは心細くて……」

漣の声に振り返ったマツシモは、その時初めて自分の顔を

しっかり見つめたような気がした。

その目は空港で会ったときと変わらず、悲しげで寂しげな目であったが、

目の奥に何かを語りかけるような人懐っこい優しさを漣は見逃さなかった。

第3章に続く

■ 第3章 ■ 潮風に吹かれて

■ 第3章 ■ 潮風に吹かれて

マツシモは道路を渡り、漣の宿泊先のホテルの脇を通り抜けた。要所所で漣の身体にそっと手を添え、エスコートをしてくれる。漣はそんな彼の所作がうれしく、心地良さを感じていた。もちろん、それらは自分に対しての特別な所作ではなく、一般的なマナーの上でのことであることは重々承知していたが、それでも少しだけ女心をくすぐられ、夜の香港を楽しむ前に、漣は女性としての歓びを密かに味わっていた…。

港に出た二人は、海沿いに設置されたウォークボードを、生温かい潮風に吹かれながら無言で歩いた。

各々の思いの中で歩いていたが、時折、

マツシモは漣の傍を離れて、遊覧船が浮かぶ海を眺めたり、遠くに見える九龍の海辺に目を凝らしたりしている。

人恋しい面持ちの横顔は、遠くにいる恋人を想って

いるかのように寂しさにあふれ、漣を傍に寄せ付けなかった。歩いて時間の経過は少なかったが、つまらなそうな顔をしているマツシモを見てしまった漣は、引き上げる潮時を感じた。

「マツシモさん、あなたには色々迷惑を掛けてしまいました。今日一日で多くの迷惑と気遣いをさせてしまって、申し訳ありませんでした。」

明日お会いできないということですから、今日の内に
お礼を言っておこうと思ひまして…。それと香港の夜景と夜の散策を
十分楽しむことが出来ましたから、ここで失礼をしたいと思います。
わがままを聞いてくださったこと、そして、

貴重なお時間を割いて頂いたことに感謝しています」

立ち止まり、漣の話に耳を傾けているマッシモに一礼をすると、元来た道を歩き出した。甘えたはいいものの、

仕方なく付き合ってくれたであろう相手のつまらなそうな顔を見た時から、

自分から誘ったことが恥ずかしく後悔もし、自分を必要とされない寂しさから、

一刻でも早く退散しなければならないと思いつめた漣の歩調は、徐々に早くなり、最後には走り出しているような感覚に襲われたとき、

背中に向かってマッシモは声を掛けてきた。

「吉野さんはイタリア語が話せますか？」

マッシモは漣の言ったことへの返事でもなく、漣の話の続きでもなく、

唐突にイタリア語が喋れるのかと聞いてきた。

背中から声を聞いた漣は、立ち止まった。

しかし、まだ恥ずかしさの中にいた漣は、

振り向くことはしないで、少しだけ腹立ちを覚えたまま、

「ええ、まあ。」とあいまいに答えると、漣に近づいてきたマッシモは、

ようやく振り向いた漣に向かって、真顔で言った。

「出来るんですか？」

「ですから、少しは……」

「そうでしたか。やはりね。実は吉野さんについて、語学が堪能な才女って

噂がありましたので、語学という中にもしかしてイタリア語が含まれているのかなって思いました」

「だから何なのですか？でも、私はあなたに空港に迎えに来てもらう

ほどの重要人物でも語学が堪能な才女でもありませんから。

ただの係長。あなたと同じ平社員です。この会社は男女平等、才能主義などとうたって募ったのに、入社してみれば男性優位。

男女平等なんて嘘っぱちだったのよ！」

さつきから口に何か挟まっているように、あいまいな口調で話をするマツシモに苛立ち、今まで溜まっていた会社への不満や、

腹立たしい気持ちを八つ当たりするかのように、吐き出してしまった。

言わないでも良いことを言ってしまった自分に驚き、

思わず口を押さえたが、時は既に遅く、一瞬ではあったが形相を変えて

立ち尽くすマツシモを見てしまった…。

しかし、相手は澪より大人だった。すぐ元の顔に戻ってつぶやいた。

「そうですね…。そうかもしれないですね。改革が必要ですね…」

澪の苛立ちに乘せられることはなく、柔和な表情を

崩すこともなく、相変わらず透き通った声でそう返事が返ってきた。

自分の苛立ちに憤りを感じているはずなのに、

言われた言葉にうなだれたマツシモを見た澪は、

冷静さを取り戻し、大きな声で抗議していた自分が恥ずかしくなっていた…。

相手は多分、自分よりも下の階級、自分にとっては部下に当たる人間に、

それも初対面の人間に、と思うと恥ずかしさが増し、

顔を上げらないまま、この場をどうにか取り繕うと思案していた。

下を向いたまま、懸命に考えていると、マツシモが何かを叫びながら突然、澪を抱きしめた。

澪は条件反射のように、抱きしめられた身体に懇親の力を入れて、彼の腕から逃れようとあがいた。本能的に相手に危険を感じたので

ある。

相手の自由にさせまいと必死に身体を離そうと力を入れ、あがいたが、

男の力には勝てず漣の身体のどこかであきらめようとしている、その時、

マッシモはようやく抵抗している漣の身体を離した。

漣の力に抵抗するために、必要以上の力を出していたことで、

腕の痛みを感じていたマッシモは、腕をさすりながら、

顔を真っ赤にして怒っている漣を見て笑って言った。

「もしかして吉野さんは、僕に危険を感じていたのではないのですか？」

だって僕の腕の中でもすごい力を出してもがいていましたから」

そう言って再び大きな声で笑った。怪訝そうな顔をしている漣を前にして、

笑いを止めることが出来ずにいたが、マッシモは大きく深呼吸をしてから言った。

「前を向いて歩いていましたか？怒り心頭の吉野さんだったから、前ではなく後ろを向いて歩いていたと思います。でも、それは完璧に吉野さんの

前方不注意。あなたの方向に向かって自転車が走って来たのですよ。それもモーターなスピードで。吉野さんに声を掛けても間に合わず、衝突すると思ったから、咄嗟にあなたを抱いて避けたのです。

もちろん、失礼とは思いましたし、きつと怒るだろうと予測をしていましたが」

漣は彼の説明を聞いて、今日は一体何という日なのだろうと、へなへなとその場に座り込んでしまった。あまりにも失敗や失態が多すぎたから、

今までになく恥ずかしい言動や行動が多すぎたから、疲れすぎて、立ち上がる力さえ失っていた。

自責の自問が始まった澪の顔を見たマツシモは、さっきまでの顔つきとは異なり、真剣な表情に戻って言葉を選びながら話し始めた。

「吉野さんって純粋なのかな？それとも幼いなのかな？

だって驚くことを隠せないし、感情も隠せない。しかも、

熱中すると周りが見えなくなってしまう。普通の大人はそれらのすべてを

他人には、増してや仕事場では一度は隠し、第三者に心の動揺を見せない。

ことに日本人は親しくなっても仕事相手には見せないはずだけれど。

吉野さんはそれらをことごとく打ち消してしまった…。

そして、今、自分を分析しているでしょう？

こんなはずではなかった。いつもの自分ではないって…。

確か僕より二歳年上のはずですが、そういうところが可愛いんですね。僕は…」

ここまで話すとマツシモは急に言葉を濁した。

澪は言葉を濁したことには気づかなかったが、自分という人間が第三者にどう見られるのか、どんな風に見られているのか初めて知った。

ただ、非難されているようでいて、肯定もされているな、不思議な彼の分析であったが、

最後の“二歳年上なのに…”と言われたことが情けなかったから、でも、可愛いですね、とか純粋な人なんて言われたことがなかったから、

少しかけ気持ち揺れていたが、澪は意を正しマツシモに告げた。

「私は慌て者のおバカだと思います…。決していじけて言っているのでは

ありません。自分でもそう思っていますから…。でも、人にはつきりと言われた

ことは初めてです。心地よいものではありませんが、言われて良かったと

思っています…。ありがとうございました。お疲れさまでした」

漣はマッシモの顔を見ることがもなく、踵を返して元来た道を足早に歩き始めた。

すると再度、漣の背中にマッシモが今度は英語ではなく、イタリア語で声を掛けた。

「明日、夕刻ここでもう一度デートしませんか？明日は香港の夜空を花火が彩ります。僕の香港の記念にしたいので、付き合ってもらえませんか」

マッシモの透き通るようなイタリア語の音色は、

夏の潮風に乗って対岸にまで届き、漣の身体にこだまするようにはじけた。

第4章に続く

■第4章 ■ 胸のときめき

■第4章 ■ 胸のときめき

精神的な疲れで昨晩は資料にも目を通さず、ぐっすり眠った澪は、爽やかな気分で朝を迎えた。

今日の香港は朝から強い日差しが照りつけているのか、部屋のガラス越しに入ってくる夏の陽光が眩しかった。前回の香港出張の過密スケジュールとは異なって、

今日はマッシモの言う通りであれば時間に余裕があり、少しの時間を利用してウインドーショッピングも楽しめそうである。それに気を良くした澪は、洋服は涼しげで軽快なワンピースにしよう、と、

好きなブルーグレーのワンピースに決めたが、会議室やレストラン内は冷房の効き過ぎで寒くなることも考えて、セツトされた紺碧色のボレロも羽織った。

朝八時半からの会議は、今後のプロジェクトの方向を定めることから始められ、香港、日本、イタリアなどを起点にしてグローバルな視点ですべて進めてゆくことを決定した。

澪のリーダーシップで決定事項はつつがなく決まり、香港を発信地にすることからアジア・カラーを前面に出したいという澪の個人的な案も承認されて会議は順調に進んだ。

進行係を勤めたロン・高田という香港支社長の秘書は、会議が一段落したのを機会に、時計を見ながら言った。

「皆様、あまりにも順調にことが進みすぎたきらいがありますが、すべて吉野さんが準備万端整えて下さったことにあります。

そのお陰で予定より三十分も早く会議を終了できました。

午後は各部署で、個別に吉野さんとの打ち合わせが待っています。

大半は後日、責任者からの指示を待つことになっています」

澪はロン氏に手伝ってもらいながら資料などを片付けた。そして、大きな荷物を持って会議室を出ながら、支社長と昼食をする時間を確認しようと、

昨晚、マッシモから渡されたスケジュール表を出すと、スケジュール表の上に

挟まれていた一枚のカードを見つけた。イタリア語だった。

「吉野様 七月三日、二十八歳の誕生日おめでとございます。

誕生日を出張先で迎えること、心中お察し致しますが、

でも、七月という素敵な季節に生まれた吉野さんがうらやましい。香港で迎える誕生日が良い思い出になりますように祈って……」

マッシモの心温まる気遣いに感激した澪は、

今夜の夜の花火のデートの誘いは、

もしかして、自分の誕生日を気遣ったことなのかと思った。

そうであっても澪はうれしかった。

出張先で一人で過ごす誕生日より、

義理でも一人でも多く祝ってくれる人がいた方がいい。

それにしてもあの青年の気配りの細やかさは、

一体どこからくるものだろうか？

一介の平社員がここまで社員に気配りをするのだろうか。

自問は赤ら顔の支社長と食事をしている間中続いた。

夕刻、仕事を終えて部屋に戻るとドアの下にメッセージが挟まれていた。

マッシモからであった。今夜七時に迎えに来るという簡単なメッセージである。

時計を見ると既に六時を三十分も回っていた。

シャワーを浴びる間もないと溼は焦ったが、汗臭い身体でこれから人に会う気にもならず、慌ててシャワーを浴びた。

髪も洗ってドライヤーをかけ、急いで着替えを済ました途端、電話が鳴った。

時計を見ると約束の時間にはまだ五分ほど余裕があった。

「吉野さんですか？マツシモです。今、ロビーにいます。

少し時間が早かったかな？待っていますので、ゆっくりと降りてきて下さい」

電話からは爽やかな声のイタリア語が飛び込んできた。

なぜ自分には英語ではなくイタリア語なのかと思いながら、

マツシモの顔が目の前に浮かんだ溼は、急に胸のときめきを覚えた。

第5章に続く

■第5章 ■ 誕生日のデート

■第5章 ■ 誕生日のデート

ロビーに降りると他の客に混じって漑を迎えるマツシモが立っていた。

しかし、ロビーにいる彼はさっきまでの一介のただの人とは異なり、漑はもちろん、周囲の人々の視線を一手に受け、注目の人になっていた。

その理由は背の高いイケメンの青年の洗練された着こなしにあった。足の長さを強調した細身のジーンズに、真っ白なワイシャツを組み合わせただけのシンプルなものであったが、

その姿は清潔感にあふれ、際立っていた。これを称して着こなし上手という

のであるが、さりげないファッションでありながら、彼の持つ美的感覚の

すべてを凝縮させたかのような密度の濃いおしゃれは、見る者の心を動かし魅了して止まなかった…。そして、

いつまで見ていても飽きのこないおしゃれの真髄を知っているのである、

漑も周囲の誰もが彼の一挙手一動を見つめていた。

周囲の人々の注目の的になっていることを知っているのか、否かは判らないが、見惚れて立ち止まってしまった漑に向かって、笑顔で挨拶をしながら、ゆっくりとマツシモは歩き出した。

会社では常につつむき加減で目立つ存在ではなく、

見方によっては本人が言ったように出世には程遠い雑用係に徹した胡散臭さも持っているような、

そんな雰囲気の中にいたマツシモであったから、漑はまだ現実を

しつかり把握できない状態の中、今注目されているマツシモが、自分に向かって歩き出したことで、焦りを感じ言葉を失っていた。

マツシモを目の先に見ながらも目を上げられずうつむいている漣に、マツシモは親しげにハグをし、イタリア語で言った。

「急がせてしまったかな？誕生日おめでとー！漣」

そう言つて、まるで映画のワンシーンのように

優雅な物腰で後ろ手に持っていた花束を人目もはばからず差し出した。

周囲の人々は一瞬、何かと目を見張つて二人を眺めていたが、愛の告白と勘違いをしたのか、一人二人が二人に向かって

拍手を始めるとロビーにいた人々も次々と誘われ、

いつの間にやらスタツプまでが二人に歩み寄つて、拍手をしていた。

それにはマツシモも驚いたが、それは束の間のことで、周りを見回した後、

悪戯っ子のように眼を輝かせ、漣にそつと耳打ちをした。

「彼らはどうやら僕たちの関係を勘違いをしているようだね。

でも、皆に祝福をされていることには違いないから、このまま騙されてやるうか？」

そう言つたマツシモは、漣の身体を抱きしめ公衆の面前で堂々とキスをした。

漣は突然のキスに足がすくみ、動悸は激しく身体全体が力を失ったかと

思つた瞬間、自分をも喪失していった…。

心身共に混乱した状態は随分と長い間続いたような気がした…。

周囲の拍手が鳴り止んでいたことだけは確認できたが、

立っているのか座り込んでいるのか、宙に浮いたように軽い身体が気になつて見回すと、思いもかけずマツシモに抱かれるようにして、

胸の中で泣いている自分がいた…。

周囲の人たちの視線はまだ自分たちに集中していることも知った。恥ずかしかった…。泣いている自分をどう思っ
てみんなが見ているのか、

とても恥ずかしく、顔を上げられる状態ではなかった。

とりあえず外に出ようとマツシモが言ったが、気が動転したまま、その言葉を遮り、もう今夜のデートをあきらめようと決心した。

「部屋に戻ります。このままでは…」

マツシモは申し訳なそうに漣の顔をのぞいたそのときから、気まずい思いが二人の間に流れ始めた…。

「ごめん。少し強引だった。部屋に送ろうね…」

キスしたのは初めての経験ではなかったが、

マツシモのことを思い始めているだけに、衝撃が大きかったから、漣は気が動転し、マツシモを冷静に捉えることが出来なくなってしまう
った。

部屋に戻った二人は、気まずい思いを抱えたままソファに座った。しかし、マツシモはすぐに立ち上がって、ドアの前まで歩き、振り返って言った。

「ごめん…。でも、僕は漣にキスしたのはあの状況に惑わされたのではない。とっさに出た僕の気持だった。信じてほしい」

マツシモはポケットから小さな箱を出した。

「誕生日おめでとう。僕のささやかなプレゼント。今夜は港に出て漣と

二人で香港の花火を眺めながら思い出にしようと思っていたんだ。でも、こんなことになってしまって…。僕は近い内にイタリアに戻る
るので、

香港での楽しい思い出が欲しかったから、君と一緒に過ごそうと…。
君の香港での仕事は明日一日。頑張って」

マツシモの告白めいた言葉が気になった。しかし、ドアを開けて去ってゆく

後ろ姿をだた見送るだけで、澪はなにも言えなかった。

予期せぬキスに未だ自分を取り戻せない澪だったから…。

そして、自分の態度が彼を傷つけたのか、ドアの前で振り返ったマツシモの顔が辛そうで悲しげであったことが脳裏に焼きついて離れず、

その晩は眠れぬ夜を過ごした。

第6章に続く

■第6章 ■ 茜色のブラウス

■第6章 ■ 茜色のブラウス

あくる日、一日のスケジュールをこなした澪は、早々に部屋に戻って帰国の準備を始めた。

明日は早朝の便で成田に向かい、その足で大阪への出張が決まっている。

空港へはホテルのリムジンバスを利用することになっていた。

出発の準備も終わった澪は、シャワーを浴びた後、階下のレストラ
ンへ

夕食をとるために身支度を整えていると電話が鳴った。

フロントからである。面会を求めている人がいるという連絡である。直感で面会の人はマッシモではないと思った。

ロビーに降りると一人の女性が待っていた。

知った顔ではなかったが、相手はエレベーターから降りてきた澪に、親しそうな素振りで見つめ、挨拶をした。

「明日、空港へのお送りができませんので、これをお渡しするよう
にと、

マッシモさんに頼まれてやってきました。

一つは東京の支社長への手土産です。もう一つは吉野さんに」

流暢な日本語を喋る彼女は、案内の窓口にいる女性だと思い出した。

澪は窓口の女性から渡された荷物を持ったまま、

ロビー脇にあるビュッフェで簡単に夕食を済ませ、部屋に戻った。

その間、マッシモから自分に宛てられた箱が気になって仕方なかったから、

すぐにも開きたかったが、楽しみは落ち着いてからと思い、歯を磨きシャワーを浴びて、眠る準備を整えてからベッドの上で徐に開いた。

中には茜色の秀麗な光を放つシルクのブラウスが入っていた。そして、

傍らには茶褐色の紙製の薄い箱が添えられてあった。

ブラウスを出し、胸に当てた澪は、昨日、会議室の前の廊下で

“吉野さんの爽やかな茜色の洋服、僕は好きです”

と言ったマツシモの言葉を思い出した。思い出しながら彼の優しさも汲み取っていた。そして、紙製の小さな箱を開くと、数枚の便箋に書かれた

手紙が入っていた。封筒ではなく小箱に収められた手紙は、澪の心を必要以上に揺すり、読む前から胸のときめきを与えた…。

「昨晚は本当にごめんなさい。僕が吉野さんの誕生日を台無しにしてしまったのです。許して下さい。」

これは僕の謝罪の気持ちです。昨晚渡した水晶のアクセサリーと良く似合うと思って選びました。

実は僕は故郷の落陽の時間が大好きなのです。

一日の内でもっとも寂しく感じる時間帯なのですが、でも、寂しさの中で自分を見つめることができるからです。

今まで青い紺碧の天空が、このブラウスのように透き通るような茜色に

染まってゆき、徐々に茜色から漆黒の闇に包まれるまでの

そのグラデーションの変化の中にあると、

身も心も研ぎ澄まされるような、そんな気がするのです。

自然が織りなすページェントは、僕の心を癒すばかりではなく、

一日の終焉の時としては格好のシチュエーションと思っています。

だからパルマにいるときは、夕刻の時間帯までに極力仕事を済ませ、雨や曇天の日以外だけれど、自分だけの秘密の場所で茜色の夕景を

多能しています。僅か数十分の間しか見ることができないけれど、僕にとつては明日への誘い（いざない）にもなっているから…。でも、だからといって吉野さん、いや、漑に僕の夢をプレゼントをしたいと

思ったわけではありません。会議の初日、漑は茜色のワンピースを着ていたよね？よく似合っていたから僕は思わず抱きしめたくなっていた…。

それほど僕の大好きなこの色が、良く似合っていたからです。

受け取ってもらえたら僕はどんなにうれしいか…」

二枚の便箋に書かれた手紙はここで一旦終わっていた。

そして、三枚目には香港で僅か二日間共に過ごしただけで

あったが、的を得たマツシモの漑への仕事に関しての忠告が書かれていた。

「会社でのあなたの仕事ぶりは僕をはじめ皆が評価しています。

だから小さなことは気にしないで仕事に励んでください。

ただし、必要以上に頑張ることはありません。無理だけは禁物です。時にはゆっくり人生を楽しむことも人生には不可欠です。

そうすることで気持ちに余裕ができ、明日に賭ける力が自ずと生まれてきます。

あなたが会社人間であることが心配です。無理だけはしないように。明日は気をつけて日本にお帰りください。

なお、会社のために必死に働くあなたは、あなたの言う通り、もう少し会社が優遇してもいいと僕も思っています。

でも、近い将来、その思いは報われると思っています。再開の日までお元気で…。マツシモ」

漑は昨晚渡された小さな箱に入ったペンダントを取り出した。

七月の誕生石はルビーであるが、七月三日の誕生石は水晶である。彼がそのことを知っていて自分にプレゼントに選んだのかは定かで

はなかったが、

遷は知っているからこそ勝手に思い、この日から肌身離さず身に付けていた。

そして、マッシモの故郷の茜色の夕景を見に、いつの日かパルマを訪れたいと思っていた。

第7章に続く

■ 第7章 ■ 旅立ち

■ 第7章 ■ 旅立ち

香港から戻って間もなく、今回のプロジェクトの陣頭指揮を執ることが決まり、

漣に転勤の辞令が下りた。転勤先は本社のあるパルマだった。

漣は辞令が下ったとき、初めての海外転勤であることとリーダーとして

失敗が許されない責任の重さと思うと素直に喜べず、

心細さと不安で一旦は、断ろうと思った。

しかし、自分が企画した仕事の責任者として簡単にあきらめることはできず、

悩み続けていたある日、情報通で知られる同僚の三富真子が

漣にささやいた言葉に気持ちが動き、パルマへの転勤を決心した。

「本社に転勤だって？イタリアのパルマでしょう。すごいわね。

大抜擢じゃない。漣だったら成し遂げるとは思っていたけれど。

社内にはやつかむ男性はいっぱいいるけれど、私たち女性はみんな同胞の出世にうれしくてうれしくてみんな大騒ぎなのよ。だから頑張つて！

そうだ、パルマって言えば香港の支店にいたマツシモっていう人の実家もパルマなんだってね。彼、」先日帰国したらしいよ。

香港にいる宮崎香苗は彼に夢中だったの。もちろん、片思いだったけれど。

その香苗のメールによると漣の栄転話が急浮上した時に、

彼の帰国も急に決まったらしく、何かつながりがあるんじゃないって言っていた。

でも私は漣の転勤と彼の帰国は関係ないと思う。なぜって？

だってそのマツシモっていうイタリア人は、格好よく、性格もいいらしく、
誰にも好かれるって聞いているけれど、でも、仕事は雑用専門らしく、
出世にはほど遠い部署にいるらしくて、私はどう考えても今回の件とつながると思えなかったの。吉野さんは香港で彼に会ったでしよう？」

澪はマツシモとは仕事の連絡で何度かメールの交換をしていたので、先日、イタリアに帰国したことは知っていたが、自己紹介の折に、パルマ生まれであることやメモにパルマの夕景が大好きだと書いてあったことなどを思い出していた。

ただ、香港ではそれなりに親しくなっただけであつたから、帰国するにあたり、お愛想でもいいからイタリアの連絡先ぐらい教えてほしいと思つてはいたが、マツシモは私的なことには一切触れず、

最後のメールには澪の身体を心配して、仕事にこれ以上、のめり込まないようにと、書いてあつただけであつた。ただ、末尾にPSとして

「いつかきつと会える日が来ると思います。その日を待っています。チャオ！」

と書き足した言葉に、澪に少しの希望を抱かせた。しかし、事務的に帰国を知らせてきたメールからは、相手は自分のことをなんとも思っていないことが読み取れ、澪は寂しかった。

幸いにも目先、転勤のための準備に心を奪われていたことで、淡い恋に惑わされる時間の余裕はなく、毎日を忙しく過ごせることがうれしかった。

そして、8月下旬、澪はイタリアへ旅立った。

夕刻時にミラノに到着した澪は、そのままマルペンサ空港近くのホ

テルに一泊し、

ゆっくり身体を休めてから翌日、列車でパルマに向かった。
ミラノからはユーロスターで約1時間半の道のりである。

漣はイタリア語が理解できることからさしたる問題も起きずに、初めて訪れるイタリアの古都、パルマに無事着いた。

友人の話によると街にはセンスのいいブティックが軒を連らね、パルマの女性も男性もお洒落上手だという。

化粧品店の多さからいってもおしゃれに敏感な街だと聞いている。

香港でのマツシモのあの素晴らしい着こなしぶりは、

パルマ育ちからくるものであったことも今は納得していた。

それだけに漣は、仕事以外にも興味津津な街として、この先、パルマでの生活を楽しみにしてやってきた。

パルマの駅には確か、ミリンダという女性が迎えに来ているはずであるが、

構内にはそれらしき女性を見つけることができず、焦り始めた漣の前に

一人の中年の男性が“Ms・Yoshino Mio”と書いた
ブラカードを

持って立った。そして、不安げな漣を慰めるようにして大きな手を
さりげなく差し出し、握手を求めながら言った。

「ミオさんですか？ようこそ、パルマへ。」

私は会社から頼まれてあなたを迎えに来ました。エンリコです。よろしく」

漣はいつもの癖で、呼びかけられた瞬間、相手を一蹴するかのよう
に、

目を大きく開けてにらむ素振りを見せるが、今日は呼びかけられるの
待つ身であることを忘れず、でも、一瞬、彼を信じて大丈夫かなと
疑いもしたが、

手にしたブラカードには確かに自分の名前が書いてあったし、大男

ながら

人の良さそうな顔つきは、どう考えても悪い男とは思えず、

エンリコと名乗った相手に気を許して握手を交わした。

そして、駅の前に止めてあった車に荷物を積み終わったエンリコは、運転席に座ると同時に、既に後部座席に座っている漑に向かって、「アパートまでこれから一時間ほど走ります」。と言って、空港を出た。

日本の残暑の時期である八月下旬のパルマは、香港の蒸し暑さとも日本のそれとも大幅に異なり、爽やかな初秋の風が吹き渡っていた。暑さに弱い漑にとっては、格好の旅行日和となり、気を良くした漑は、

これからこの街の住人となって暮らすことに、胸の高まりを感じていた。

そして、車窓の流れ行く景觀を眺めながら、この同じ空の下のどこかにいるだろう

マツシモのことを久々思い出した漑は、最後の彼の手紙に書いてあった

“パルマの夕刻の茜色のグラデーション”を早く見てみたいと思っていた。

第8章に続く

■第8章 ■ 面影の人の街に

■第8章 ■ 面影の人の街に

パルマは誰もが知る美食の街であった。なかでも世界的に知られるパルミジャーノ・レッジャーノ（最高級のチーズ）とプロシュット・デイ・パルマ

（最高級の生ハム）の生産地で世界中に名を馳せているが、

漣は食の文化としてのパルマよりは、オペラが盛んな街として、また、エミリア派画家を代表するコレツジョやパルミジャーノを敬愛する街として興味深く、美術ファンの漣としては、心をときめかせる街のひとつでもあった。だから、

新天地での仕事がちがって、毎日のように街の散策に出かけ、中世からナポレオン公国時代の遺物、そして、彼らの作品が残されている教会や、

国立絵画館など多くの文化や美術に触れていたいと、夢を馳せていた。

目先、パルマでの仕事や生活に慣れるまでは、

きつと心身共に疲れることも覚悟はしているが、それだけに街の散策への

憧れは大きく、漣を夢の世界に誘って（いざなって）もいた。

エンリコが案内してくれたアパートは、街の中心地から少し離れた閑静な

住宅街の一角にあった。周辺はかつての繁栄を偲ばせる中世の歴史的建造物が軒を連らね、風情あるたたずまいを見せている。

漣はイタリアの転勤が決まったその日から、パルマの街について学んでいたが、

元よりイタリアが好きだったことから、イタリア文化に関しては自

分なりの

興味を持っていた。この会社に応募したのも本社がイタリアであったからだ。

イタリアの食文化を基盤にして、輸出を本業とするこの会社は今やイタリアの食文化だけではなく、アジアなど多方面に渡って、各国の食文化や芸術を広めようとしていたのも漣を応募させた理由のひとつになっていた。そして、

漣は社内その企画コンペに応募して、今回のパルマ転勤の栄冠を手に入れたのであるが、マツシモに会社の基本方針について、不満を言った途端に、この栄光とも言うべきポジションについたことが、

深刻には考えないまでも、なにか漠然としながらも不思議に思えた。漣はパルマの街を窓外に眺めながら、もしかして同僚の言う通り、目に見えない糸でマツシモとつながっているのかもしれないと思っていた。

ドライバーのエンリコの言う通り、空港から五十分足らずで市中に入り、

石造りの重厚な外観の石造りの建物の前に車は横付けされた。

「ラッシュにも合わずに定刻どおり着きました。ここが今日から吉野さんの

宿舎となります。素晴らしい建造物でしょう？もちろん由緒あるものです」

そう言って車から荷物を降ろしたエンリコは、建物は中世のファルネーゼ公の時代に建立されたと得意げに話しながら、漣がこれから自宅に使用する2階の部屋に案内してくれた。

五階建てではあるが古い建造物であることからエレベーターはなかった。

不便さはあるだろうが、階段や廊下の各所に中世のままに壁画などが残され、

まるで重要文化財のような歴史的建造物に住めるのが漣にはうれしかった。

案内された部屋のドアを開けると目の前にリビングが広がっていた。格調高いインテリアに飾られた広い部屋は、驚くほど天井が高く、天井の四隅にはフレスコ画が描かれていた。そして、その奥には一人住まいには贅沢すぎるのではと思うほどの広いベッドルームのほか、

すべてが日本の一般的なマンションとはけた違いの広さのキッチン、バスルーム、そして、窓辺には鉢植えの花々が置かれたベランダがあった。

漣はここがこれから一人住まいの自分の部屋なのかと、目を皿のように大きく開き、エンリコの顔を見た。

「ここが私の部屋ですか？私の自宅になるのですか？」

「はい、そうです。吉野さんは我が社にとって重要人物ということなので、

上からの指示でここを確保致しました。といっても実はこの建物は会社が

所有しています。最上階には会社の重役が住むことになっています。なにせ最上階には豪華で広いお部屋がいくつもありますから」

部屋にはその日から暮らせるように日用品、食器類、そして、キッチン道具などすべてが整えられていた。

後は東京で送った衣類などの私物が到着するのを待つだけである。

エンリコが帰った後、リビングの片隅に置かれているライティングデスクの上に、

手荷物で持ってきたパソコンや資料などを並べ、ベッドルームに備えられている

収納ボックスやチェスターに数日間の着替えなどを整理しながら収めた。

そして、日本から用意してきた花柄プリントの可愛い雑巾を徐に出した

漣は、イタリアでの初めての雑きん掛けを済ませた。

雑きん掛けは、母譲りのことで、その日に使用する机やテーブル、そして、鏡などに毎朝、起きがけに軽く雑きん掛けをすることで、しっかりと目覚め、一日の初めを迎えるという、漣の習慣になっていた。

もちろん、イタリアでの生活の初日にはどうしても実行したかったことで、

まずは“初め”が大切であつたから、時刻が朝でなく夕刻であつても構わなかつた。とにかく、初めてのこの日に雑きん掛けをすることにより、

自分を叱咤し、激励の意味も含まれていた。

ただ、調度品のすべてに骨董的な価値があるように思えた漣は、大事を取って乾いたままの雑きんで丁寧な埃を拭き取るという作業に入つたものだから、三十分ほどで済ませる予定が、

大幅にずれ込み、昼過ぎから夕刻の五時過ぎまで掛かつてしまった。

しかし、念願の雑きん掛けを済ませたことで、

ようやく長旅から解放された漣は、爽やかな気分でシャワーを浴び、着替えを済ました。そして、旅の疲れも大してないことで、

リビングのソファにくつろいだ漣は、エンリコが帰り際に

「会社からの引越祝いということであつたので少しの食料が入っています」と置いていった紙袋を開いた。簡単な夕食代わりのパンなどが入っていることを期待しながら袋を開くと、中には予想外に多い品物や

食料品が詰まっていて、漣を驚かせた。

メモと共に携帯電話と充電器の他、ミラノパンの他、パン類は二三種類の

コルネットやクッキー、それとフルーツ、缶詰、インスタントコー

ヒー、ワイン、

そして、うれしいことに日本のインスタントラーメンが入っていた。
メモには

「この携帯電話は吉野さん用です。充電は毎日行ってください。
明朝は八時半に迎えの車を回しますので、待っていてください。

なお、明日は夜七時から吉野さんの歓迎会をする予定になっていますので、

時間を空けておくようにと、上から指示がありました」

という連絡事項が箇条書きで書いてあった。

新天地での明日からの仕事が心配であったが、至れり尽くせりの迎え方に

満足した澁は、今夜はプレゼントされたワインでも飲んで、
ゆっくりと心身を休め、明日からの仕事に英気を養おうと思った。

ベランダから見るパルマの夕景はマツシモの言う茜色の空ではなかったが、

なぜか香港で交わしたマツシモとの会話が頭の中で繰り返され、
一抹のわびしさを覚えながら異郷での最初の夜を迎えた。

第9章に続く

■第9章 ■ 予期せぬ再会

■第9章 ■ 予期せぬ再会

メモに書いてあった時間に迎えの車がやってきた。玄関口前で待っていた車のドアを

開けながら、朝の挨拶をすると運転席から後ろを振り返ったドライバーは、

昨日のエンリコではなく、鼻筋が通った美しい顔立ちの女性であった。

「おはようございます。吉野さんですか？イタリア語が堪能と聞きましたので、

イタリア語で話しても構いませんか？私は三階に住むダニエラ・ピアンツィです。

初めまして。ダニエラって呼んでください。それと日常のことではないにか

困ったことがあったらいつでも、遠慮しないで言ってお下さい。

ここに部屋番号と携帯の番号をメモしておきましたから」

ダニエラは太り気味の身体を持て余しながら、後部座席に座る漣を振り向き、

漣にメモを渡しながら、英語は苦手なのと付け加えた。

九時少し前に会社の通用門に着いた漣たちは、

ゲートで身分証明書の定時を求められた。

漣は東京の会社を出るときに渡されたイタリア語と日本語で書かれたIDカードを出すと、警備員がパソコンで照合し、敷地内に入ることを許した。

ダニエラは玄関ポーチまで漣を送ると、

「私は車を駐車場に入れてきますので、吉野さんはエレベータで

六階の応接室へ行つて下さい。上司が挨拶に参りますので」
そう言い置いて車を駐車場まで置きに行った。

高層ビルではないが、十階ほどあるのだろうか、瀟洒な外観が際立つ本社ビル

の前に立つた漣は、頭を下げて無言の挨拶をした。

そして、広いロビーホールの右手にあるエレベータで指示通り、六階の応接室に入った。入った方がいいが応接室には誰もいず、勝手に座る訳にもゆかない漣は、窓辺に寄つて外を眺めていると、お茶を持ったダニエラが入つて来た。

「しばらく椅子にお掛けになってお待ち下さい」

さつきまでの馴れ馴れしい口調とは異なった言葉遣いのダニエラが気になったが、テーブルにお茶を置いて出て行く彼女の背中に小さな声でお礼を言つて漣はソファに腰を掛けた。

しかし、座つた途端、落ち着かなくなりすぐ、立ち上がってしまった。

とはいうものの上司とやらが入ってきたら、立つたまま迎えるのも、
と思い直し、また座つてもみた。

緊張からか漣は、今度は乱れてはいないことを知りつつ何度も
衣服を直したり、何度も髪に手を当て、身づくろいを整えて上司を
待った。

待つ間、逃げ出したくなるような緊張感が漣を襲い、

身体が硬直して行くのが判つたが、逃げる訳にも行かず、

誰も来ないのを見計らつて、再度、立ち上がった。

部屋を歩いて気持ちを紛らわせようと思つたのだ。

しかし、立ち上がったと同時に奥まったところにあるドアが開き、
二人の男性が入ってきた。

漣の立ち上がるタイミングが良すぎたのか、

二人は顔を見合わせたようだが、漑は前をよく見ないで、そのまま深々と頭を下げ、初対面の挨拶とした。いつもなら漑は日本でも相手が外国人ともなれば、軽快に手を差し出し、慣れた手つきで握手をして挨拶を交わすのに、よりによってこのイタリアで、純日本式の挨拶を交わしていた。もちろん、そのことに漑は気が付いていなかった。

顔を上げると初老の男性とマツシモが目の前に立っていた・・・。
漑は初老の男性の差し出した手を無意識に握りしめ、握手を交わしながら、

傍らに立つマツシモの顔を見つめたまま、微動だに出来ずにいた。
初老の男性は握ったままいつまでも手を離さない漑に笑いながら、言葉をかけた。

「吉野さん、吉野さん、手を離して下さい。どうしたのですか？」
マツシモは、初老の男性の挨拶の後、漑に声を掛けようと待っていたが、男性の困り果てた顔を見て笑いながら言った。

「この人はどんな場所でもどんな時でも自分を隠せないんです。
僕を見て驚いて、今頭が混乱していると思います。でも、彼女はそれを隠そうとはしない。というより誤魔化しで取り繕うことが出来ないんです。」

「いつだってこの人は自然体なんですよ。こんな人、そうそういません。」

仕事でも同じです。人目を誤魔化さないし、自分というキャリアをとことん出し切ります。

彼女のキャラクターはこの会社には貴重な存在になると僕は思ったのです」

漑はまだマツシモがこの会社にいることが読めなかった。
彼は会社を辞めて実家に戻った、と聞いていたからだ。

本人のメールの中でも確かそう言っていたはずである。

パルマの初日から頭が混乱した漣は、しばらく頭を冷やす必要があったが、ここで座を去る訳にはゆかず困り果てていると、

「吉野さん、話があるので廊下に出ましよう。社長、五分ほど時間を頂きます」

マッシモはそう言つて香港のあの日のように、漣に助け舟を出した。

廊下に出るとマッシモは漣の両手をしっかりと握り、

「ようこそパルマへ。この日を待っていたんだ。」

でも、今は緊張の頂点にいるんだね。よし、一緒にリラックスしよう。

うーん、そうだ。昨日の夜はどんな夢を見た？僕の夢かな？

きつとそうだね。といいたいけれど、そこまで僕はうぬぼれじゃない。

でも、僕にとっては女神に等しい漣との再会をずっと心待ちにしていた。

今日という日がとても待ち遠しかった。元気だった？ちょっと太ったのかな？」

漣のパルマの初日は、こうして驚きの中で始まったが、初めて出逢った

初夏の香港でのあの日は、生涯愛し続ける相手とのめぐり合いだけではなく、

漣の人生を変えるターニングポイントにもなっていたことを漣は、今、

実感していた。そして、近い将来、マッシモと茜色のパルマの夕景を楽しむことができる予感があったが、なぜかその先は暗い袋小路に追い詰められた自分の姿が見え隠れしていることに気づき、

マッシモの優しいまなざしの中で、漣は再び落ち着きを失っていた……。

■ 第10章 ■ 優しさの中で…

■ 第10章 ■ 優しさの中で…

予期せぬ再会からようやく落ち着きを取り戻し、冷静になった漣は、なぜマツシモがこの場にいるのかは解らなかったが、

今度は懐かしさとよもやの再会のうれしさで涙があふれてきた。

「…ひとつ質問をしていいですか？ どうしてあなたはここにいますですか？」

漣の感激の涙に、もらい泣きしそうな雰囲気の中にいたマツシモは、質問にはダイレクトに答えず、なぜこうなったのか、説明を始めた。

「この異郷の地で、心細さと緊張感で震えている漣を見ているのが辛い。

でも、僕はどうしても漣にこの仕事をして欲しかった…。

だから、香港まで出張したんだ。漣の評判をこの1年間聞いてきたからね。

評判通り企画力に優れた才能を発揮し、相手の心を一瞬の内に掴んでしまう、

仕事の出来る女性、という評判が本物かどうか、

また、吉野漣という人物がどのような人かを、目の前にして直接確かめたかったから、香港まで出向き、君と接触も持った…。

でも、僅か数日間だったけれど、君の傍らにいてよく解った。

吉野漣という人は、考えていたよりもはるかに素晴らしい才能と人間味にあふれた女性であることに僕は驚いた。

物を売る、ということは人に心を売ることにもなるって言ったんだろう？

その時、僕は会社の未来を賭けた仕事を課せる人は、この人しかないと思ったんだ…。それだけではない。

恥ずかしいが僕は目から鱗が落ちる思いだった。

結果、漣に大変な役目を課せることになったけれど、

僕と一緒にこの企画を成功させたいと思って、香港から帰国した」

漣はパルマでの仕事始めが、待ちわびたマッシモとの再会と重なるとは

努々思わなかっただけに、その後も自分をなかなか取り戻せず、本社での一日目を終えた。初日ということで、自分の部署に留まることなく、

会社の重役たちへの挨拶回り、そして、これから共に働く同僚たちへの紹介などで、

実務にとりかからなかったことが、漣にとっては救いであった。

帰り際、ダニエラがデスクを訪れ、今夜の歓迎会はマッシモの予定が付かないので、中止になったと伝えてきた。

漣は水晶のペンダントを握りながら、歓迎会の中止は、疲れている自分を

氣遣ってくれたのであろうと、彼に心から感謝した。

そして、初日の昼過ぎ、ダニエラから会社からは朝夕送迎バスが出ていることを

教えられた。しかも、送迎バスは漣やダニエラの宿泊所になっている社員アパートの前に毎朝、停車するという。

漣は帰りには早速、通用門から送迎バスを利用して家路についた。

バスの降り際、ドライバーが漣の肩を軽く叩き、声を掛けた。

「吉野さん、パルマはいかがですか？予想通りの素敵な街でしたか？」

顔を見ると空港に迎えに来てくれたエンリコだった。

漣はマッシモ以外に顔見知りのイタリア人に会ったことで、なぜかほっとした。

「パルマはいいところだよ。皆優しい。ところであの出口に待って

いるのは君の友達かい？ 彼はこのバスの後を車でずっとつけてきたようだが。

パルマの男性は優しすぎて困ることもあるが、彼は安心していいよだね」

そう言つてエンリコはウィンクをしながらその方向を指差した。

振り向くとアパートの出口にマツシモが立っていた。

エンリコもマツシモと顔馴染みだったのだろうか、

安心していい相手だと言つてくれたのがうれしかった。

エンリコがバスから降りる溇を見届けてバスを発進させると、マツシモは溇の傍にやってきた。

「お疲れ様、今日は大変だったね。もし、君が良ければこれから出かけたい。

どうかな？ 疲れているだろうけれど、少し話しておきたいこともあるし」

溇は急なことで戸惑ったが、香港以来、ゆっくり話したいという気持ちもあり、

誘いに応じることにした。

アパートの横に停車してあった車に乗ると、マツシモは運転しながら「今日、驚かせてしまったことをまず謝りたいんだ。いるはずのない僕が、

何の前触れもなく出現すれば、誰だって驚く。溇にとっては大切な日だったのに、申し訳ないことをしてしまった…。ごめん」

そう言つて溇の顔を見た。懐かしい顔だった。何度も夢に見た顔だった。

「仕方ないわ。私って重要な日にいつも失態を見せる人だから、これも定めだったと思つていい。でも、どうしてマツシモさんは私と同じ部署で働くことになったの？ 香港ではそんな素振りを微塵にも出すことはなかったのに…」

「マツシモさんはやめようよ。僕だって漣って呼んでいる。マツシモでいいよ」

会社でも名前で呼んでほしいと付け加えながら、漣の質問に答えようと

マツシモは構えたが、それより先に、

漣は何かに気づいたように真顔で再度、質問をしてきた。

「会社での話しからすると、もしかして香港では最初から私を観察するために

近づいたのね？新しいプロジェクトを組む上で私を必要とするか否か…。

仕事上では納得はできるけれど、でも…。私はもしかして勘違いをしていた…」

そこまで話した漣は香港の夜を思い出し、マツシモの気持ちを勘違いしていた

かもしれないと思った。自分が恥ずかしかった。どうしようもなく恥ずかしかった…。

そして、淋しく悲しくもなってきた…。自分はマツシモも好きになつてしまったから、

マツシモに振られたのかと思うと涙があふれ、この場にいたたまれなくなつた。

「…車を止めてください。お願いですから私をここで降ろして…」

マツシモは車を道の端に寄せ停車した。ドアを開けて外に出ようとする漣を、

マツシモは強く手を握って自分に引き寄せ、抱きしめた。

「漣、違つんだよ！そうじゃない…。勝手な想像で僕の気持ちを判断されては困る。話を最後まで聞いてほしい。お願いだから」

腕の中でもがく漣を必死に抱きしめていたマツシモは、

そう言う腕を揺るめ、涙で濡れている漣の顔にそっと口づけをし

た。

泣かないでと言いながら何度も何度も口づけをした…。

漣はそのとき、マツシモの誠実さを初めて見た気がしていた。

香港でもわがままに振舞う自分を、大きな懷に包むようにして、

慰めなだめたりしてくれたことを、久々のぬくもりの中で思い出し

たから…。

そして、漣は香港の夜の続きのようなマツシモの優しさの中に

初めて自分の気持ちをゆだねていた…。

第11章に続く

■ 第11章 ■ 愛の世界

■ 第11章 ■ 愛の世界

寒さが増してきた車の中であつたが、漣は今でなければマツシモの気持ち

確かめられない気がして、黙って耳を傾けていた。香港以来、ずっと悶々として気になつていた彼の心の中だつたから…。

「香港では最後まで、僕の立場を言えなかつたことは、僕のずるさかも

しれないと今は後悔している…。でも、僕の迷いを少しでも解つてくれたらうれしいけれど…。それと僕はあのホテルで漣にキスをしてしまったことを悔いてはいないことを言いたかつた。

でも、一方的な僕の気持ちを面前で露にしたことで、漣を傷つけてしまったことは申し訳ないと思つてゐる。

でも、良く聞いて。僕はあの雰囲気を押されて思わず漣を抱いてしまったけれど、僕は漣が愛おしかつたから、あのような行動に出たと思つてゐる…。

そして、今日なぜ、この時間に漣に会いにきたかというところ、明日から僕と漣は仕事のパートナーとして付き合い合ふなければならない。

い。それだからこそ、僕は今、自分の気持ちをはっきりと伝えたいと思つた。

もしかして愛しているのかもしれないとも思つてゐる…。」

「これから仕事上で意見の相違があつて、お互いに気まずい思いをしても、

漣への僕の気持ちが変わったとか、変わるのではないのかと思つて

ほしくないから、お互いに約束し合う必要があると思って、今夜
漣に会いたかった。だから、もし、気まずい思いをしたら、
その日の内にすべて解決しよう。難しいかもしれないけれど、
僕たちの世界を守るにはそれしかないと思う。いいね？」
そこまで言ったマツシモは漣の顔を見た。いつも爽やかで明るい
顔で漣を見つけるマツシモの顔は、今は苦渋に満ち苦しそうであっ
た。

「香港でのことはあなたの気持ちをどう理解していいのか判らなかつた。

ゲーム感覚であのような行動に出たのかもしれないとも思った…。それにイタリアに帰ることを報せてくれたのはうれしかったけれど、最後の最後まで事務的な言葉しか送ってくれなかったから、だから、あなたのことは早く忘れたいと…」

そこまで話した漣は、次の言葉に口ごもっていると、マツシモの顔が急に明るくなり、うれしそうに漣の顔を覗きながら言った。

「もしかして漣も僕と同じ気持ちでいてくれたんだね…？僕を忘れようと努力をしなければならぬほど、僕のことを思っていてくれた…」

漣は素直にうなずいた。マツシモの自分に対する気持ちが判ったから、

今は躊躇しないで、自分の気持ちに素直になれる自分がうれしかった。

この夜、漣は生まれて初めて異性により与えられた幸せに出会い、生きている喜びを感じていた…。何もいらぬ、この時間の中に生きることが

できただけで、もう何も望まない…。そう思った漣は、マツシモの愛の世界に

すべてを捧げて生きてゆきたいと決していたが、マツシモは幸せな

時間が

長く続く中で、この先、自分の愛した相手を一分でも一秒でも長く、そして、大きな歓びを感じてもらえるようにするには、どうしたらいいのか、

思案に暮れていた。それは明日から始まる仕事からみの恋人との世界だからゆえに、心配は募った…。

マツシモの腕の中にいた漑は、そんな相手のため息まじりの息遣いに気づき、

少しだけ表情を曇らせて顔を上げた。

そのとき、香港では一度も見ることもなかった愛らしい漑の顔を始めて

見たマツシモは、もう一度漑を胸に強く抱きしめた。

“君はどうしてこんなに純粹で愛らしい表情ができるのか…。

どうして偽りの表情ができないのか、僕はずっと考えていた。

でも、僕は今解った、君は偽りの世界を知らないからだ…。

しかし、これではあまりにも無防備すぎる。だから僕が傍らにいないければ

君は世間の波に飲み込まれてどうにかなってしまうだろう…。”

無言でそうつぶやいたマツシモは、なぜか悲しみの中で漑の顔を見つめていた…。

「僕の好きな茜色の夕焼けを漑にも見せたい、僕の一番好きな公園に行こう。」

そこでパルマの茜色に染まる夕空を一緒に見よう」

と言って明るく笑ったマツシモの顔はいくらなしか紅潮していた。

まるで少年のように汚れない横顔のマツシモを見ながら、

漑は初めて、自分はこの人と離れたくないと思っていた。

深々と冷え込んできたパルマの初秋の夜に、マツシモと漑は時間も

忘れ、路上駐車違反にも恐れず、話は続いていた。

そして、マツシモはこのとき、既に漣との将来を決していたと友人に告げている。彼女を離れたら僕は二度と漣のような女性には巡り会えないだろうし、生涯後悔をして生きてゆくだろう…とも告白していた。

第12章に続く

■ 第12章 ■ 愛すればこそ（前書き）

明けましておめでとございます。

本年もどうぞよろしく願います。

読者の皆様にとって良き一年でありますことを祈って。

■ 第12章 ■ 愛すればこそ

■ 第12章 ■ 愛すればこそ

パルマは小さな川で新市街と旧市街の二つに区切られている。そして、旧市街の一角である川沿いには歴史的建造物や教会、絵画館など多くの観光ポイントが点在していた。

そのひとつが河畔に広がるドウカーレ公園であった。

白い砂が敷き詰められた美しい公園は市民の憩いの場として知られるが、

マツシモもその一人で、公園から眺める夕刻の情景をこよなく愛していた。

漣がパルマに来て初めての週末、マツシモに誘われて午後からドライブに

出掛けた。途中、メルカートで生ハムとパン、ワイン、そして、フルーツを買い込み、

初秋の天高い美しいパルマ郊外をドライブした後、午後五時過ぎに、自分の愛する場所を見せたいと言って、再びパルマ市中に戻った。

ドウカーレ公園前のパーキングに車を預け、マツシモの案内で漣は園内に入った。

家族連れであろうか屋外パーティを開いている楽しげな人々を横目で眺めながら、マツシモは漣と連れ立って歩くことを楽しんでいるかのように、

時折、美しい口笛を漣に聞かせながら白い砂の上を軽快な足取りで歩いていた。

「そういえば漣の履歴書に美術が好きだって書いてあったことを思

い出した。

オペラも映画も好きだって。履歴書を読んだとき、以外にも多趣味だなんて

思った。それと同時に驚いたことにパルマには漣の趣味のすべてが揃っている偶然がうれしかった。だって噂通りであれば漣はこの街に間違いなく転勤するはずだから、漣の喜ぶ顔が目に見えんできた。といってもその時、僕はまだ漣の顔も姿も見えたことはなかったけれど、

なぜか会う前から漣の顔が近くにあった……。不思議だった。

そして、今漣は僕とこうして憧れの街を歩き、僕の自慢の公園の中にいる……。

そうだ、公園のすぐ近くには、高名な画家たちの作品が一堂に集まったピロツタ館や国立絵画館、教会など軒を連ねているんだ」

漣は香港の出逢いを振り返りながら、幸せそうに話すマツシモの言葉をここで遮った。

自分だってどれほどパルマに憧れていたのかを知って欲しかったから。

「知っているわ。私の大好きなコレッジョやパルミジャーノの作品が収蔵されているの。」

私はなかでもエミリア派画家を代表するコレッジョが大好き。

秀麗なタッチで人物を描くから。ただ彼の作品は美し過ぎるの。

どんなことでも過ぎるってことは危険性もはらむから、良くないと思う。

でもね、彼の作品はなぜか自分に向けられて描かれたような、そんな気がして、見ていると自分自身に置き換えてしまうの。

そして、不思議にも哀しくなってくるの。私も過ぎるからかな……」

マツシモはいつだって自分の世界になりふりかまわず埋没する漣の

姿も知っていたから、この辺で現実に戻さなければと、さっきの澪同様、今度は自分が言葉を遮った。

「澪は自分の好きなことになる子供のように熱中して話しまくる。香港でもそうだった。澪はいつだって一つのことに没頭するとその世界にどっぷりと浸かって周りが見えなくなってしまう。見栄を張らず、いつだって化粧をしない自分をさらけ出し、慌てんぼうで、自分を見失うと泣き出し、一人で悩み続け…。そんな時の澪は美しい…。でも、危険を感じることもある…。コレツジヨの作品の澪の分析は当たりかもしれない。過ぎるって決していいいことではないと僕も思う。それが澪のキャラクターのひとつになっているのも心配だ。何事にも過ぎるから、周りが見えなくなることも多々あるし、澪自身の疲れは相当なものだと思うから心配で…。ただ、いい加減さの代表のような僕にはまぶし過ぎるけれど…」

公園の一角に休息の場所を見つけ、白い砂浜に座った。

パルマに来てまづ一週間しか経過していないが、マツシモの傍らにいと、

ずっと前から共に生きてきたような、温かで優しい時間が澪を包み込んでいた。

そんな澪にマツシモは今言うべきことではないのかもしれないと思いつつ、

愛し始めた一人の女性の一途な性格が無性に心配になり、

改めて澪と膝を交えて口を開いた。

「これから嫌なことや辛いこと、悲しいこと、苦しいことがあったら必ず

僕に言うんだ。遠慮しないで必ず…。いいね？

仕事のことでいい。私生活のことでいい。とにかく隠し事をしないで、

正直に僕に助けを求めてほしいんだ…。これは澪のためじゃないん

だ。

僕のために…。そうしてくれないと僕は心配で何も手につかなくなるから」

初秋の風が吹き始めた八月下旬のパルマの夜に、

白い砂の上で漚とマツシモは再会した喜びと愛の確認をし、

パンとワインでこれからの二人の再出発を祝ったが、

初デート以後、マツシモの不安はますます募り、この夜の約束は

空手形のように時の経過の中で消えてゆくとは、この時は思いもしなかった…。

第13章に続く

■ 第13章 ■ プロポーズ…

■ 第13章 ■ プロポーズ…

転勤して三ヶ月を過ぎようとする十二月、漣の仕事は日毎忙しさを増し、

マツシモとも会社で顔を合わせることはあっても、二人になってゆっくりと

時間を過ごすことが少なくなっていた。

そんなある日、社内では幹事のダニエラが中心になってクリスマスパーティーの計画が始まっていた。

漣はイタリアに来て初めてのクリスマスを迎えることで、

内心、楽しみにしていたが、仕事からくるストレスなのだろうか、昨今は食欲が落ち、仕事への気力も減退している。

早めにクリスマス休暇を取り、日本へ里帰りすることも考えたが、年明けには本格的に動き出す今の仕事が心配で、漣は決心がつかなかった。

そして、十二月二十日、仕事を終えた漣はクリスマスのパーティーに誘われ、

久々、マツシモの迎えの車に乗り込んだ。

マツシモとはこのところプライベートに会う機会が少なく、

寂しく過ごしていた日常であったが、共に仕事をする仲間の一人であることでわがままも言えず、我慢していた。

そんな我慢が漣を苛立たせているのか、ストレスが最高潮になっているのか、

今夜はなぜか感情が高ぶり、声高でマツシモに答える漣がいた…。漣もそんな自分に驚きを隠せず、言葉が少なくなっていたが、

運転しながら漣の顔を時折覗き込んでいたマツシモは、突然、車をＵターンして元来た道に戻った。そして、今晚のパーティー会場になるはずのレストランとは反対の方向に走り出した。

「どうしたの？マツシモ、道が違うわ…」

漣の問いにも答えず、パルマ市街地を走り抜け、街の西側の高台に向かっていった。

マツシモはなにか言おうとする漣を制止し、自分も一言も言葉を発しない。漣は仕方なく、座席に身体を預け目を閉じた。

二十分ほど走ったであろうか、車が止まったことで漣は目を開けると、

目の前にマツシモの苦渋に満ちた顔があった。

さっきまでの苛立ちを抱えていたこともあって、思い詰めたマツシモの顔を

凝視できなくなった漣は、黙ったまま車の外に出ようとする、マツシモは漣の腕を取って強く引きとめた。そして、何かを決心したような

深刻な表情で漣に言った。

「漣、仕事を辞めてくれないか？辞めて欲しい…」。

理由は色々あるが、最大の理由は漣の疲れがもう限界に来ていると思うから。

…いつか言おうと思っていたが、今夜はちょうどいい機会だ。

明日から会社はクリスマス休暇に入る。そして、来年に向けて漣の企画の

仕事動き出す。君は精一杯働いた。誰もが認めていることだ。

でも、漣の身体も精神も今や限界だから…。

心配で心配で僕は見ていられないから…。

僕のためにも会社を辞めてくれないか？なぜなら」

漣の顔を見つめたままマツシモは大きく呼吸をし、そして、この先は僕の願いだと思って聞いて欲しいと言った。

「…漣、僕と結婚してほしい。この先、一緒に人生を歩んでゆきたい。」

愛しているから…。君を生涯失いたくないから。僕の傍らで生きてほしい…」

漣は呆然として聞いていた。マツシモからプロポーズの言葉を聞いても、

喜びは感じられなかった。それよりも仕事を辞めてほしいと言った彼の言葉が痛みとなつて漣を襲っていたから…。

漣は何も言わず、車を降りた。

高台の風は冷たく、冬の寒風が吹き荒れていたが、車の中に引き返すことはなく、

身も心も凍りつくような寒さの中で、マツシモが言った言葉に

悲しむ自分を風の彼方に見ていた…。

仕事を辞めることが結婚の話につながっていたことが悲しかった。

二者択一のようなそんな結婚はしなくなかった漣だったから、

愛した人から二者択一を求められたことは辛すぎた…。

だからといって結婚をあきらめて職場に残ることも今や望んではない。

何も見ることが出来なくなった白い風の中で、漣は後ろを振り返った。

そして、遠くに陽炎のように揺れているマツシモに向かってつぶやいた。

“仕事を辞めるということは今の自分を捨てるということです…。自分を捨てるってどういうことか判りますか？”

今までの自分を否定するってことにもなります…。
それと私は仕事のためにこのパルマにやってきましたが、
香港からこのパルマで過ごした時間のすべてをも否定し捨てるので
す…。
もう疲れすぎて何もかもが嫌になりました…。”

第14章に続く

■ 第14章 ■ 哀しい決心

■ 第14章 ■ 哀しい決心

寒風の中から車に戻った漣は、マッシモには何も答えなくて、元来た道に戻るようになり出た。クリスマスのパーティにも出たくないことを告げ、宿舎まで送ってほしいと懇願した……。

こんな暗い気持ちのまま、仲間に会い、クリスマスを祝う気分にはなれなかったから、わがままだと承知しながら、マッシモに無理を言った。

マッシモも漣と同じ思いであつたから、素直に元来た道を振り返り、気まずい思いを乗せたまま、車は走り出した……。

プロポーズの言葉を聞いたときの漣の表情から、マッシモは早急に答えを欲してはならないことを、理解していたから……。

今漣の気持ちを正常に修復することは不可能に近いと解っていたから、

車の中でも結婚や仕事のことなどには一切触れはしなかった。ただ、お愛想でダニエラの家族のことなどを話の種に、声を掛けたが、何を言っても無言を通す漣に怒りを覚えた……。

マッシモは怒りを覚えたその瞬間から後悔をしたが、前を向く気持ちにはなれず、悔やみながら車を走らせ、宿舎の前に着いても、顔も見ないでそのまま別れた……。

マッシモは後ろを振り向かず、あふれた涙を拭いもしないで、ひたすら走り続けたが、自分の気持ちに素直にならず、漣を振り返らなかつたこのときのことを後悔し続けた、と漣を失つた当初、友人に語っている……。

部屋に戻った漣も、マッシモと同じように

今まで我慢していた悲しみが一気にあふれ、ベッドの上で泣いた…。悔しさもあふれ出て大きな声で泣いた…。

折角のクリスマスパーティーを無にしたのも淋しく、その上、今年最後というのに言葉のひとつも掛けてくれなかったマツシモの冷たさも恨んで泣いた…。しかし、涙があふれ出る大半の理由は、

自分の身勝手さとわがままに悲しみを覚えていた澪であつた…。

マツシモと同じように、素直になれなかった自分の気持ちに

腹立ちすら覚えた澪は、悔しくて涙が止め処もなく流れ落ちた…。

そして、涙が枯れ果てたとき、澪にはたった一つしかない選択肢である

帰国という決心を否応がなしにもしなければならなくなっていた…。

捨て鉢になっていたこともあるが、愛する人との生活も

どうでもよくなってしまうたから…。仕事にもなんら魅力を感じなくなっていたから、パルマを去ろうと決心をした…。

悲しみの中での一大決心は、澪の心を荒んだものにしたらから、年末は誰とも会わず、一人で過ごした。

マツシモは責めてクリスマススのプレゼントを渡したいと思い、何度か携帯に電話を掛けてきたが、澪は電話口には出ず、部屋を訪ねても、ドアを開けることはなかった。

ダニエラを通じて恋人の状態を知ることができるマツシモは、彼女jの凍った心の解けるのを待つしかないとあきらめ、

しばらくはそつとしておくことを決めたが、

ひたすら自分を見つめることしかできなかった澪は、

翌年、一月の休暇明けの早朝、本社に出向き、

二ヶ月間の休暇届を提出し、その足で日本へ帰国した。

パルマの本社には身体の具合が悪いという理由で、

休暇を申し出てきたが、東京に戻った澪は、古巣の支店に

顔出し、同僚や上司に挨拶を済ませた後、退職願いを届け出た。

支社長はパルマから既に連絡を受けていたようで、

「なにも退職することはない。吉野君の気持ちが落ち着くまで、これは僕が預らせてもらうよ。海外勤務は心身ともに疲れるからね。」

君の気持はよく判る。でも、パルマの社長が君の仕事ぶりを称賛している。

それを励みに少し休養すればいい」

そう言つて慰められた。もちろん、退職届けは辞める一ヶ月前に提出する

約束であつたから、その日に辞職するつもりはなかつた。

ただ、不思議だつたのは、休暇届を出した新年の日付で、自分の身分がなぜか係長から課長に変わつていた。

人事異動の季節でもなかつたから、本社でなにがあつたか知らないが、

最後のご褒美かもしれないと澪はそのとき思った。

辞める意思是揺ぎ無かつたから、昇進は納得していなかつたが、クレームをつける気にもならず、そのままにして、仕事のバトンタッチを

後輩にするために、一ヶ月間懸命に日々を過ごした。

そして、一カ月後、澪は強引なまでに辞職し東京を去つた。

そして、予定していた和歌山の友人宅に身を寄せた。

春爛漫の三月下旬のことであつた……。

友人の咲江はこの和歌山の離島、大島の漁師の土橋睦夫の妻である。恋愛の末、東京からこの大島へ嫁いだのは5年前のことである。

子供は三人。年子が二人という子宝に恵まれ、

子育てと漁師の夫をサポートする忙しい日々を送つていた。

咲江は疲れて氣力を失い、頬もこけた澪を見て笑つた。

「馬鹿ね。澪はいつだつて自分が見えなくなつて。それでも大人？」

とにかく、オゾンをつぶり吸っておいしい魚介類を食べて、
太って帰りなさい。海に出て魚の陸揚げでも手伝う？それもいいか
もね」

漑の傷心した姿を五年振りに見た咲江は、漑が会社を辞めたことだ
けは

知っていたが、なぜ退社したのかは一切聞くことはなく、
休暇のつもりでのんびりと過ごすことを進めてくれた。

三代続く古い家系であることから地元では船主の名家で知られ、
周辺の漁民たちの信頼が厚かった。

咲江は嫁ではあるが居心地の良い生活環境の中で幸せだと言った。
幸いにも咲江の家は部屋数が多く、少人数での生活であることから、
空き部屋が多く、漑は奥まった二つの部屋をあてがわれた。

漑はパルマを出た時、ダニエラのメールアドレスのみをメモし、
マツシモに関しては、一切を胸の中で断ち切ってきた。

パルマでは余り楽しい思い出はなく、逆に仕事上での辛い思い出し
かなかったこともあり、彼とのことはあの夜の争いを境にして、
すべて暗闇の中に葬ったつもりであった…。

そして、香港での出逢いだけが漑とマツシモをつなぐ想い出であっ
た。

今思えば、パルマでは係長としての吉野漑が存在していただけで、
あの時点でのプロポーズは、自分をプロジェクトから

外すための口実であったのではないのかと、悲しみの世界の中で
身勝手な想像をする漑の姿があった…。

第15章に続く

■ 第15章 ■ 想い出の地

■ 第15章 ■ 想い出の地

咲江は2歳の乳飲み子を背負い、夫たちが漁から帰る朝8時過ぎには、

港で待ち、陸揚げの手伝いをしている。

そして、澪が居候をして半月も経過すると、

咲江は悲しみにいつまでも暮れる澪に様々な用事をいいつけ、のんびりとさせてはくれなくなった。

親友であっても今は所詮、居候のみである澪は、咲江の所望どおり、漁師たちが漁を終えて帰り、一服する時の飲み物や

食べ物で咲江の姑と朝早くから台所に立って作るようになった。

そして、ハードワークであったが、今まで経験したことのない猟師の生活を

ある意味では楽しく、興味津々の世界で過ごすようになって、海辺に立ちながら、澪はこの1年間の自分の足跡を消さなければ、前に進めないことに悲しみを覚え、海原に向かって泣く日々も少なくなり、

咲江の家族や仲間たちに囲まれて、多忙な日々を送るようになっていた。

いつしか、心身の不調も忘れ、咲江の望みどおり、三キロも体重が増えたことを知ったとき、そろそろ暇を取るころかと思っいとまた。

「気が付いたら私はここに三ヶ月間余も居候してしまった。色々ありがとう……。今までにない経験をさせてもらったし、なによりも咲江や咲江の家族から元気をいっぱいもらちゃった。本当にありがとう。もう大丈夫。だからそろそろお暇をしたいと思っつてて。」

これから？まだ判らないけれど、実は香港の友人と一緒に仕事をやらないかって東京の帰ってすぐに話があったの。でも、その時は心身共に

めちゃくちゃだったから、返事を先延ばしにしておいた。でも、今はそこで再出発してみようかなって思っている。

私って色々な意味で香港に縁があるらしいし、

もし、その話が今も生きていればうれしいんだけど」

漣は六月下旬、大島から串本に渡り、和歌山の海に別れを告げた。

実家は東京郊外の八王子市にある。両親は健在であるが、家は弟夫婦が継いでくれたことで心配はなかった。

漣は会社勤めの時は、東京にワンルーム・マンションを借り、独立をしていたが、イタリア転勤と共にそこを引き払い、荷物などは実家に預けてあった。

両親は親不孝の見本のような漣を既にあきらめており、

一旦、実家に戻り、香港へ再び行くと告げても、

お前の好きなようにすればいい、としか言わなかった。

漣も両親には申し訳ないと思いましたが、このまま実家にいても弟夫婦に迷惑を掛けることは必至であつたし、

実家に留まることは漣のこの先の人生設計にはなかったから、親の元を今度こそしっかりと離れて、自分の道を歩もうと思っていた。

実家に別れを告げ、久々、東京に出てきた漣は、

この数か月間忘れていたパルマでの仕事のその後が気になったが、会社に顔を出すこともなく、香港の友人の好意的な返事で、

六月末、梅雨の真っ只中に香港へ旅立った。

初夏の香港は二年前と変わらず蒸し暑く、空港から出た途端、汗が噴き出した。いつもの定宿である海沿いのホテルを一週間、

予約しておいた漣は、乗り合いバスを利用して香港島へ向かった。今度の旅はすべて自前ということ念頭に置き、ホテル住まいの内に、友人に会い、仕事の段取りを決めながら今後の住まいを決めようと思っていた。

オーシャンビューの希望通りの部屋をとった漣は、早速シャワーを浴び汗を流した後、

着替えを済まして落ち着いた。そして、夕刻までの時間をどう潰そうかと何気なく、

窓辺から港の風景を眺めていると、今まで忘れていた、というより頭の中から

葬り去ったはずののマッシモとの思い出が鮮明に蘇ってしまった…。

漣は焦り窓辺から思わず目を反らしたが、時は遅く、

マッシモと港を散歩したことをはじめ、ホテルでの咄嗟の抱擁、

茜色のブラウス、そして、あれ以来、片時も離れたことがない

水晶のペンダントをプレゼントされたことなど、走馬灯のように蘇ってきた。

それらは悲しみの中であつたが、懐かしく恋しく、そして、最後には哀しみの旋律と共に暗い波間に消え入っていった…。

友人と午後七時に待ち合わせて夕食を共にすることになっていた漣は、

まだ時間があることから頭を冷やすために部屋を出た。

どこへ行くともなくホテルを出て、海辺を散歩していると、

「吉野さんですか？お久しぶりです」

と声が掛つた。流暢な日本語を話すので、もしかして日本人なのかと思つたが、

見覚えのある顔は日本人のそれとは異なるアジア系の顔立ちであつた。

首をかしげながらも必死に相手の名前を思い出そうとしている澪を見て、

再びその人は澪に声を掛けた。

「私の名前は思い出して頂けないと思います。だって、

吉野さんは私の名前をご存じないと思いますもの…」

そして、今度は悲しげな表情をして澪に訴えた。

「もうだいぶ前に吉野さんは、会社をお辞めになっていたのですね。パルマの友人からの便りで知りました。あんなに素晴らしい企画を持っていた

吉野さんが、本社に栄転になってほどなくお辞めになったということが、

しばらくは信じられずにいた私でした。でも、その噂が事実であることを

知ったときは、残念で残念で仕方ありませんでした…」

名前も知らない彼女であったが、澪はなぜか懐かしく、親しさを籠めた話し方に

心を許した澪を見計らったのであろうか、彼女は澪とゆっくり話をしたいと申し出た。

その晩の香港の夜は風が強く、パルマの高台の寒風の中で、マッシモに別れを告げたあのクリスマスの夜を澪はなぜか重ねていた。

第16章に続く

■ 第16章 ■ 愛する人に

■ 第16章 ■ 愛する人に

澪は名前をアンディとだけ名乗った彼女と海辺の小さなカフェに座った。

彼女はカフェに落ち着くと、香港島の支社の受付にいたことを澪に明かし、

香港出張に来る自分をいつも憧れの人の一人として見つめていたと言った。

同姓ながら見惚れるほど、仕事に対しての意気込みが強く、中でも誰も持ち合わせてはいない澪の企画力は、特筆すべきものがあつたと、男性社員たちは常に脱帽していたことも告げた。

その上、自分たちのような一介の平社員にもやさしく、朝な夕なの挨拶ひとつにも気配りをしてくれたことが、うれしく、同僚の間には澪ファンが多くいたことも明かした後、

アンディは澪ファンの一人として、澪が会社を辞めた寂しさを持ったまま、二ヶ月前に寿退社したと告げた。

会社を辞めたことに対しては澪を責めるような口ぶりが何度かあつたが、それほどまでに自分を惜しんでくれていることに感謝し、女性として、また、一介の会社人間として社内では、自分にそれなりの評価がなされていたことを教えてくれたアンディに感謝した…。

だから、アンディにお礼を言おうと話を遮った澪は、彼女と最後に会った二年前の香港出張を思い出していると、アンディは本題に入っていていいですか？と澪よりも前に再び問いかけてきた。

「本題って何ですか？」そう返事を返すと、アンディは「会社とマツシモさんのことです。多分、吉野さんはご存知ないのではと」

思いまして、老婆心ながらお教えしたくて…」

漣は構えた。マツシモについて何を言い出すのか解らなかつたから、怖くて思わず構えてしまった…。身体が硬直してゆくのが判った…。嫌な予感がしたからであつた。しかし、単なるマツシモについての噂話だつたら、

聞く耳をもたないことを言うべきだとも思っていた。僅かな時間であつたが、

漣は様々な話の内容を想定し、それに対処するいくつかの術を考えいていたが、

しかし、アンディは優しい顔を向けながらも漣を容赦せず、遠巻きに威嚇しながら、

話から逃げることを許さなかつた。

「この半年ほど前に吉野さんが担当していたプロジェクトは解散してしまいました。

上手く事が運ばなかつたようです。私は吉野さんが陣頭指揮をなさつて

いるとばかり思っていましたから、解散と聞いたとき信じられませんでした。

吉野さんは遠い昔にこのプロジェクトにはいなかったのですね…。

もし、あなただつたらこのような結末は迎えなかつたはずですから驚いた。去年末には順調に進んでいたはずなのに、その数カ月後には、

企画は頓挫し、プロジェクトチームが解散？納得できる話ではなかつたから、

今や一般人である身を忘れ、なぜ途中で碎けるようなことになつたのか、

ことの真相を知りたくなっていた。自分の立場も忘れてアンディにそれを尋ねて

いいものかどうか迷っていると、アンディは今までの鋭い目つきから、

悲しそうな顔をして澪を見つめた。

「マツシモさんがいなくなってしまったようなのです…」。

チームの最高責任者である彼がいなくなったから、

当然のごとくすべてが止まり、すべてが頓挫したのでしょうか。

詳しいことは知りませんが、いつだったかこの香港に来ていないか、という

問い合わせがあつたものですから、私は気になってパルマの同僚に尋ねたのです。

本社からマツシモさんのことを聞いてきたのは、今思えば吉野さん
がお辞めに

なつた二ヶ月後くらいですね。マツシモさんがいなくなつたことと、
吉野さんが会社をお辞めになつたことは関係があるのではないのか
と、

私は思いました…。もちろん、確証があつたわけではありませんが
…」

“マツシモがいなくなるなんて…。でも、どうしてマツシモが消え
るの？

彼は仕事を途中で放りだして逃げるような人ではない…。

増してやこの仕事は彼が選んだ企画…。一体どうして？”

自問自答を繰り返す澪に、アンディは再び哀しげな表情を見せた。

「吉野さんがマツシモさんの前からいなくなつたことが、
彼を追い詰めたのかもしれないと思つたのは、彼が以前、
香港の友人、マイケルに吉野さんと仕事をしたくなかつた、

と打ち明けていたことを思い出したからでした。

彼は吉野さんを一人の仕事のパートナーとして

見ることができなくなったからって。だからといって吉野さんがいなければ、

この仕事は前に進まないって、彼は悩んでいたと言っていました」

そして、少し間をおいたアンディは、

「ですから、マッシモさんが消えたのは仕事が詰まったからではなく、

あなたがいなくなったからではないのですか？私はそう思います…」

漣はアンディに言われなくても、話の途中から自分が仕事を辞めたことで、マッシモを追い詰め、彼を混乱させてしまったことではないのかと

思っていた…。プロポーズの答えも出さぬまま、仕事も捨て去って、身勝手な行動を起こした自分に疲れ果て、すべてを捨て去ろうと思った

のではないのかと…。そう思った漣は、わがママが過ぎた自分が許せなく、

辛さに耐えられなかった一年前の自分に嫌気がさしていた…。

そして、苦しさの余り後先を考えず、現実逃避した自分がおぞましく、

怖くもあつた…。愛する人を傷つけた自分が許せなかった…。

そんな漣に追い討ちを掛けるように、いつも口癖のように言っていた彼の言葉が漣の心の中を徘徊し始めた。

“漣は目先のことに夢中になると周囲が見えなくなる…。だから僕がいないと

漣は自分で自分を駄目にし、自分を見失ってしまう。心配で心配で仕方ない…”

マッシモの言葉は立ち直れないほど漣を打ちのめした。

自分を犠牲にしてまで愛する人を守ろうとする彼の言葉は、

今の漑には非情としか言いようがなく、哀しみのどん底に陥れた…。

“目先しか見えない自分は、相手の気持ちも心も読もうとはしなかった…。

去年のクリスマスには言いたい放題のわがままで彼を苦しめ、自分のことはさて置いて、懸命に漑を心配してくれるマツシモのことは

なにひとつ考えていなかった自分が疎ましく思う…。

彼の真の姿を見ないで、自分ばかりを見ていた自分が嫌で恐ろしい…”

彼に対して、取り返しのつかないことをしてしまったのではないか、と思った漑は、アンディの前であつたが堪えきれず、涙があふれてきた。

アンディは黙って漑を見つめていた。泣き崩れる相手に掛ける言葉がなかった

から、苦しみを共有しながらもただ、じっと見つめていた…。

第17章に続く

■ 第17章 ■ 哀しみの真実

■ 第17章 ■ 哀しみの真実

アンディとカフェに座り込んで一時間ほど経過していた。

その間、なぜか澪は、涙の奥で大島を離れるときに港まで送ってきた咲江が、最後に言った言葉を何度も思い出していた。

「澪は仕事か恋愛かって悩んだって言っただけで違うと思う。

悩んだなんて嘘よ。だって私たちを見て。仕事と家庭、

つまり澪にとっては家庭は恋愛かな、その両方をやってのけてるわ。この二つはどこまで行っても交わらないの。異質なもののよ。

だから、澪に勇気があったら彼の求婚も受け、仕事も続けられたはず。

今を良く見て。自分の今をしっかり見つめてみるのよ。

あれほど大切に思っていた自分の企画を捨て、会社を辞め、

結局、今風来坊でしょう？ 澪はパルマで自分の人生そのものを捨ててきたのよ。

彼に仕事を辞めたら今までの自分の人生を否定することって

言っただけで、でも、今澪は自分でその人生を否定している。

そう言っただけの下から自分から仕事を辞め、愛している人まで捨てたのよ。

パルマで彼に言ったことはそのまま自分に置き換えられると思わない？

そのことに気が付いていないでしょう？

澪は愛した彼から離れたから、仕事も捨てられたのかもしれない、と私は思う。

つまり、今の澪は仕事と愛する人が共になければ生きてゆけないのかもしれないの。もちろん、二つは異質なもののよ。でも、

漚にとっては両者が同時進行のような気がするの。

もし、今でも愛しているなら彼の胸に飛び込むのよ。

プライドなんて自分だけにあるものだから。そんなもの

捨てちゃいなさい。捨てた時、漚はきつと愛する人も仕事も手に入るわ」

遅すぎるかもしれない。遅すぎたかもしれない。

でも、漚は今自分のためにもマツシモに会わなければならないと思った。

だからアンディにどうしてもマツシモに会いたいと告げた。

手を合わせ、咲江の助言通り、プライドを捨て会わせてほしいと懇願した…。

アンディは漚の言葉に大きくうなずいた。うれしそうにうなずいた。

「マツシモさんの親友だったマイケルという人がこの香港にいますから、会ってみますか？今連絡を取ってみましょう」

アンディは携帯電話を取り出し、まず、自分の友人に電話を掛け、その後、二人を経由してアンディの電話はマイケルに行き着いた。そして、アンディはその夜、イギリス人のマイケルを紹介してくれた。

マツシモとは本社時代からの盟友であつたとアンディは背の高い精悍な体つきの男性を漚に紹介した。

「マイケルです。あなたのことはマツシモから聞くまでもなく、あなたの香港出張の際、何度かお見かけしていました。

部署が異なりましてので、あなたは僕を知らないでしょうけれどもね。

さて、本題に入りましょうか。香港支社にはマツシモのファンが大勢いますから、噂が噂話を大きくし、

彼の行方はあらぬ方向に行っているようですが、

マツシモは今、パルマにいますよ。といってもこの半年間は
ボルツアーノというアルプスの麓の村で、友人宅に居候を
しながら英気を養ってしているようですが。

会社は噂だけではなく辞めています。ただ、

僕たちが心配しているのは、会社を辞めたことだけではなく、
彼が気の病で日々苦しい思いをしていることなのです。

といってもこれといった病名の病ではありませんよ。

吉野さんに振られたことが原因となって、以来、生きる氣力を
失ったかのように仙人のような暮らしをしているようなのです。

誤解されては困りますから、先に言っておきますが、

失恋の痛みなどという簡単なことではなく、

吉野さんの退職とプロポーズを拒否されたことが重なったことで、
失意のどん底に落ちた彼が、結局、そこから這い上がる氣力を

奮い立たせる力がなかったのでしょうか、そのまま今に至っていま
す。

こればかりは例え親友の僕でも治せなかったし、励ましも逆効果
…。

しかし、神様がいたんですね。だって今夜何の前触れもなく

ここに吉野さんという名医を連れてきてくれた。これで一安心かな？

彼はあなたの顔を見れば、きつとすぐ元氣を取り戻すと思いますよ。
だってね、香港であなたに恋した彼は、僕にこう報告したんですよ。

“吉野溇って人はとんでもない女性だった。頭でっかちで慌てんぼ
うで、

独りよがりで、今までに会ったことのないような変な女だった。

だから四六時中、彼女から目が離せない。こっちだって忙しいのに”
って、鼻の穴をふくらませて興奮して言っていました。

うれしくってたまらない時に鼻を膨らませて話すマツシモ特有の癖
は、

その日は夕刻まで続いていましたね。そして、

次の日にはしゃあしゃあと僕にこう言った。

“明日は彼女の誕生日。これからプレゼントを買いに行くつもりだから、

午後二三時間時間をほしい。彼女の誕生石は水晶なんだ” って」

マイケルから聞くマツシモの話は澪を哀しみの世界に閉じ込め、パルマのあの茜色の夕日の中に立ちすくむ愛する人への思いを大きく募らせていた…。すぐにでも逢いたいと澪は初めて思った…。

マツシモに一目でもいい逢いたいと思った…。

そして、澪の脳裏には突然、何の前触れもなく、一年前の年の暮れにマツシモとの別れたあの日が走馬灯のように巡り始めた…。

辛く悲しい思い出は澪を再び、哀しみに染め、涙の海を作らせているが、

よく見ると哀しみの世界の片隅には、懐かしいマツシモの姿が見え隠れ

していた。見落とすことはしなかった澪は、このチャンスに賭けた…。

マイケルの話の端から抜け出した澪は、今感じ思っている

この思い出の世界から、彼の腕の中でもがいたあの日の強い風が、自分の影をパルマ郊外の山奥で暮らすマツシモの元に運んでいることを信じ、賭けにすべてを託してマツシモの名前を呼び続けた。

“マツシモ、私が行くまで待っていてください。もし病なら私が行くまで待っていてください。

もし、辛かったなら、悲しかったなら、苦しかったなら…すべて私もあなたと分かち合いますから、私がゆくまで待っていてください。

こんな私でも待っていてくれますか？あなたにとっても逢いたいのです…。”

世界の果てまで届くだろうと、このとき、澪は奇跡を信じて無言の叫びを続けた…。

■ 第18章 ■ 僅かな光に…

■ 第18章 ■ 僅かな光に…

漣の誕生石を購入したその日のことを話し終えたマイケルは、少しだけ暗い顔になり、改めて漣の顔を見つめた。

「これから話すことは決して軽い内容ではありません。

マツシモの個人的な苦悩なんかもありません。

そして、あなたには辛い話になるだろうと思いますが、でも、僕はあなたは知るべきかと思います。

なぜなら吉野さんは、マツシモの今回の突然の仕事からの逃避に深く関わりあっているからです…。ただ、僕が今なぜ話すのかを

先に言っておきましょう。吉野さんの考え方次第ではすべてが救われる

可能性があるからです。ですから辛くても我慢して聞いてください」
そう言ったマイケルは、コーヒーを口にして一息入れ、視線を再び話しに戻した。

「まず、あなたの企画は、会社にとってはそれなりにプラスがある
と思ったから

選ばれたと思います。それはアジアン・カラーを前面に出すという
ある意味では

冒険的なものでしたが、今までにない斬新な企画でした。

ただ、マツシモのノリで進めたこともあり、

会社は冒険的なものゆえに危険も感じていました。

しかし、東洋人で優秀な女性である吉野さんが陣頭指揮であれば、
という約束事があったの決行でした。もしかしてあなたはそれは知らなかった？

だからあなたは軌道に乗る前に退職できたのかもしれないと僕は思っています。

しかし、理由はなんであれ仕事を途中にして去ってしまった吉野さんに対しての

責任のすべては、マッシモにありましたから、責任を取らされました。

上司から様々な中傷を受けた彼は、最後まであなたをかばい続けていましたよ。

仕事内容がきつく、ストレスが溜って倒れてしまったと懸命に……。倒れる寸前まで仕事をやって、結局、心身不安定で寝込んだとも。

社長には吉野さんを追い詰めたのは自分だから、と言ってあなたの無罪を主張するために直談判までしたようですよ。

結局、マッシモの勝ちでいつあなたが戻ってきてもいいように、昇進までさせたのです……。すごい気迫で頑張っていました……。

マッシモはその後、あなたのいない分、仕事を励みました。

あなたに恥をかかせないようにと必至でした。でも、結果はご存じの通りです。

結局、ダニエラに仕事の引き継ぎをして、あなたが去った二ヶ月後に、

責任を取って会社を辞めました。理由は色々あると思いますが、彼から聞く限り、吉野さんはもうパルマには戻らないことが判明したから、

だから会社に残る意味が薄れたことと、自分にはあなたの代わりができないことが

判ったから、と……。ある意味では仕事を途中で放棄したかもしれないませんが、

マッシモの力では逆に会社にマイナスを与えと思ったのです。

彼は早々とリタイアを決めただけで、決して消えたものではありません。

ただ、会社を辞めた後は、多分、僕にしか居所を教えていなかった

ようです」

「今思えば、香港に彼がいなかったかという問い合わせの声は女性の声でしたね。ダニエラさんかも知れません」

とアンディはマイケルの後に付け加えた。

澪はことの真実を聞き、立ち上がれないほどのショックを受けた。咲江の言う通り自分はなんという身勝手な人間なのだろう。

責任ある仕事を捨て、知らなかったとはいえ、愛する人にその責任を負わせ、会社まで辞めさせてしまった。

今マツシモはどんな気持ちで日々を過ごしているのか、

また、会社もどれほどの被害をこうむったのだろうか。

マイケルと別れた後、澪の心労を気遣ってアンディはホテルまで送ってくれた。

部屋に戻った澪は、自問しながら自分のあまりの愚かさに耐えられなかった。同時に無責任な今の自分の生き方を悲しく見つめていた。

香港での友人との約束も忘れ、ひたすら苦しみ続けていた…。

一年前の別れのあの夜、強い風の中に立ち尽くすんでいたマツシモの姿が

鮮明に思い出されようとしていたとき、突然、マイケルの言葉が蘇った。

“…ただ、僕が今なぜ話すのかを先に言っておきましょう。”

吉野さんの考え方次第ではすべてが救われる可能性があるからです。ですから辛くても我慢して聞いてください”

マイケルは確かにそう言った、と澪はダニエラと三人で話した今日の午後のことを

思い出し、可能性について未だ何も聞いていないことに気がついた…。

マイケルの「可能性がある」という言葉にすぎた漣は、遠くの先に僅かではあったが小さな光が見え隠れしているのを目に留めた。

漣は漠然としながらも藁をも掴む思いでその光を見据え、祈った。

“北イタリアの村で一人で生きるマツシモに私の祈りを届けてください。”

私は今日が覚めました…。あなたが傍にいてくれなければ、私は幸せに

生きることが出来ないことが今判りました…。あなたが一年前に私にそう言っただけなのに、たった今私の心の奥底に届いたので…。

もう遅いのですか？もう手遅れですか？手遅れでもいいのです、私が行くまで待っていてくださいませんか？”

第19章に続く

■ 第19章 ■ 愛する人への祈り

■ 第19章 ■ 愛する人への祈り

お酒をたしなめない溼であつたが、その夜は寝付けないことを承知していたから、

部屋の冷蔵庫からビールを出し飲み干した後、ほろ酔い気分でベッドに入った。

計算通り、アルコールが睡眠薬代わりになつてベッドに臥した途端、記憶を失うように眠りに入つたが、深夜十二時過ぎ、

電話で眠りを覚まされた。受話器を取るとマイケルの声が聞こえてきた。

「お休みでしたか？こんな時間に申し訳ないと思つたのですが、明日からのことでお聞きしたいことがあつて。

吉野さんはいつまで香港に滞在予定ですか？後六日間。良かった。

早速ですが明日都合をつけて会社へ来てもらえませんか？

マッシモのことで相談したいことがありますので。

午前十時でいいですか？受付で待っています。よろしく」

一方的にまるで命令するかのようになり明日のことを言ってきたマイケルで

あつたが、腹立ちは覚えず、それどころか自分たちのことをこんな真夜中まで気にしてくれていることがうれしかった。

ただ、折角の睡眠を妨げられたことには、少し不満があつたが、明日、再びマッシモのことで会えることが何よりもうれしく、

結局、まんじりもしないで朝を迎えた。

朝十時前、久々、香港支店に出向いた。入り口に入り、まっすぐ受付まで歩くと、

待っていたのは、マイケルだけではなく、支社長も一緒であった。漣は驚いたばかりではなく、一年前に仕事を途中放棄した自分が恥ずかしく、思わず身体を硬くして一步下がった…。

そして、支社長に申し訳ありませんでしたと深々と頭を下げたはものの、

顔を上げることができなくなっていると、支社長はもう終わったことだから、

と笑いながら漣の肩を叩き、顔を上げるようにと言った。そして、

「少しやつれたかな？ 吉野君らしくない。以前のように明るい、ノー天気な君に戻って欲しいね。周りが暗くなってしまう」

冗談ともつかぬ言い回しで漣を慰めてくれた。

「いえね。今日はマイケルのたつての願いで君に会うことにしたんだ。」

会社を去った吉野君には迷惑だろうって言ったんだが、

マイケルは僕の意見など右から左。とにかく、

会ってプロジェクトの今の状況を話したいからって、聞く耳を持たない。

僕の同席が迷惑だったら断ってくれて構わないからね。

君は今はこの会社の人間じゃないんだから、拒否も否定もなんでも堂々とできるんだ。遠慮しないでいいからね」

マイケルはロビーの一角のソファに漣と支社長を並んで座らせ、

自分は二人の前に座を占め、話を始めた。

「まずは支社長に聞いてほしいのですが、ご存知のように既に吉野さんたちが立ち上げた例のアジアンカラー云々のプロジェクトは解散していますが、企画としてはその他のものを含めてまだ生きています。」

マッシモも当初の計画とは異なるが、いくつかの企画は生かしたいと懸命でしたが、なにせスタッフが力量不足でした。だから、

未だなんら進展もなく、宙ぶらりんの状態です。でも、繰り返しますが、

一年前のチームはなくなってしまうましたが、企画そのものは死んでは

いないということです。そして、今、吉野さんとマツシモが力を合わせれば

その企画は再び息を吹きかえすことが出来ると僕は思ったのです。

というのも細々ですがパルマ本社ではダニエラが二人の後を継いで前に進ませようと頑張ってくれています。といっても彼女はマツシモが

残した案件をひとつひとつ検証し、学んでいる段階で、

事を進めて行くまでには至っていません。それととにかく、

不都合があっても彼女には修正できる力はなく、

吉野さんのようにひらめきのようなプラスアルファがないのが現状です。

企画力の優れた吉野さんのひらめきがその場で加味されて、初めて買い手の心を掴めるヒット商品、売れる商品が作れると思うのです。

それはプロジェクトを組むときのプレゼンでも吉野さんが訴えたことですが。

支社長、ダニエラが温存しているその企画に手を加えて、

生き返らせたいと僕は思っています。このままにしておくには

勿体ないと思ったから、そして、たまたま吉野さんに会うことができたから、

これは神様が与えて下さったチャンスではないのかと思えたのです。僕の願いと彼女の登場はそうそうないグッドチャンスと思ったのです。

それと一年で挫折した今度のこの企画の損失は大きいと思いますが、少なくともこのまま見ているだけより、生き返らせた方が、会社の負担は少ないと思ったのです。どうですかね？」

黙って聞いていた支社長は、マイケルの言う通りであれば、書面化して持つてきなさい、と言ってその場を去った。

漣は突然の話で驚いたが、マイケルは

「今支社長に話したことは事実。でも、実はマッシモに息を吹き返させる手段だはこれしかないと思っている。

吉野さんはどう思ったか判らないが、

会社にもある程度の損害を与えたプロジェクトだから、彼はそのことでもかなりまいつている。

少しでも損害を少なくさせるには、と同時に捨て去るには勿体ない企画だと思ったから、僕は昨夜考えた。

マッシモも自分を責めるだけではなく、会社のためにもう一働きしてほしい。そうできれば彼の気持の負担が少しでも軽くなるはずだ。

と言ってもこの話は吉野さん抜きではできないことだけれど」

会社だけではなく、マッシモもダニエラにも、そして、親友のマイケルにも

要らぬ心労を与え、自分だけが被害者のような顔をして

この一年間生きてきたことを恥じ、後悔していた…。

マッシモとは比べものにならないほど、多くの人々を傷つけて…。

これこそが自分への過信そのものであることを知った…。

その午後、約束してあった友人に会って事の詳細を打ち明け、今回の香港目的の約束を果たせないことを謝罪して、ホテルの部屋に戻った。

漣は明日、もう一度マイケルに会い、今後のことを決めることになっていた。

マイケルの親友を心配する気持ちだけではなく、漣の企画も信じてくれた

マイケルの今回の提案は、漣に再びマツシモの生きる世界に身も心も投じさせる勇気をくれたばかりではなく、新たに始める仕事を

マツシモを立ち直させるチャンスにしようと画策するマイケルの優しさがうれしく、漣を再びマツシモの生きるパルマへと導いた…。咲江の言う通りプライドも今までの生き様もすべてを捨てて、愛する人のために生きようと決心したから…、

暮れなずむ香港の海に向かってマツシモに呼びかけた。

“私は今あなたに逢いたい。とても逢いたい…。そして、あなたの愛の世界で共に生きたい…。だから待っていてください…。”

第20章に続く

■第20章 ■ 愛する人へ

■第20章 ■ 愛する人へ

翌日、再び漣は香港支社へ出向いた。受付でマイケルを待っている
と、

アンディがやってきた。自分のことを気遣ってマイケルが
連絡したのだろう、と漣は思った。

「大丈夫ですか？私は部外者ですが、今日は私も同席させてもらい
ます。

マイケルには承諾を得ていますが、吉野さんはよろしいですか？

実は私が色々お話を聞かせてしまったことで、

あなたを動揺させてしまいました…。それが

良いのか悪いのか、悩んでいるところに、

事の成り行きがとんでもない方向に向かって

しまったことを昨夜、マイケルの電話で知りました…。

私が吉野さんに声を掛けたから、このような事態になってしまった
ことに、

責任を感じていますし、もしかして吉野さんにとって不都合な結果
になって

しまったのではないのかしらと、心配もしております…。

ですから、マイケルに今日、差し支えなければ同席させてくださいと
お願いをしました。…それとあなたへの心配だけではなく、

吉野さんがこの先どのようなになるのか、知りたくなってしまった
のも確かです…。

ご迷惑とは思いますが同席させて頂ければ…」

漣はアンディの真心に触れてうれしかった。自分の身を案じ、

先のことまで心配をしてくれる、そのことだけでもうれしいのに、アンディが声を掛けてくれなければ、自分はこの先ずっと、後悔の苦しみの中で彷徨っているはずだとも告げた。

そして、今日は傍に居て欲しいと自分からも願い出た。

一人より二人、そして、三人の方が自分らしさを取り戻せると予感したからだ。

マイケルもほどなく受付に来て、階下の応接室に二人を招いた。

そして、ソファに座る間もなくマイケルは挨拶もそこそこに話し始めた。

「吉野さんは来週まで香港にいてください。今、ホテル住まいですよね。」

会社で今日からのホテル代金は支払うことになりましたから、先を急ぐので申し訳ないとは思いますが、今日から派遣社員というのかな、

会社の仕事に携わってもらいます。昨日もお話したように、まずは企画の練り直しをお願いします。いいですね？

その後、パルマへ行くことになりましたが、ご実家とかへの連絡は今からしておいてください。行方不明者になつては困りますから。パルマへは僕も同行します。ご存知のように僕は部署が異なりますが、

昨日、支社長に今回の企画のみ自分も参加したい、という願書を提出しました。来週、早々には受理されると思います。

詳しいスケジュールは毎日の中で決めてゆきましょう」

気がつけば香港に来て半月ほどの時の経過を経ていた。

澪は香港での思いもかけない出逢いや久々取り組んだ仕事で、心身共に疲れがひどかったが、マイケルに助けられながら、なんとか企画を練り直してまとめた。

そして、七月三日、仕事を終えて部屋に戻った澪は、

二十九歳の誕生日を一年前の誕生日祝いにマツシモから贈られた水晶のペンダントを胸からはずし、そのときの添えられていたカードを

手にし、何度も読み返しながら、ひとり静かに過ごした。

“素敵な季節に生まれた吉野さんがうらやましい。

香港で迎える誕生日が良い思い出になりますよう、祈って”

涙で見えなくなっていたが、空暗記しているマツシモのこの言葉の意味をもう一度しっかりと胸の中で読み返し、間もなく会えるはずのマツシモに答えた。

“あなたがうらやむこの素敵な季節に生まれたことを感謝し、あなたと逢えるその日まで、茜色のこの季節をしっかりと胸に抱きしめていたい…”

なぜならあなたにもう一度、この季節に生まれたことをうらやんでほしいから…。

なぜなら素敵な季節に生まれていなかったら、

私はあなたと巡り逢えなかったかもしれないから…。そして、なぜなら、いつの日かこの香港であなたと共に誕生日を迎えたいから…”

二十九歳の誕生日を孤独の中で過ごした澪は、淋しくはあったけれど、

アンディとマイケルという素晴らしい友人を得、陰になって見守ってくれる親友の咲江の檄を飛ばす声に励まされた澪は、悶々として暮らしていた今までを吹っ切り、明日からの自分に少しだけ

明るい未来を見ていた。

■ 第21章 ■ 愛の証し

■ 第21章 ■ 愛の証し

翌日、アンディに空港まで送ってもらった澪は、いつの日か必ずマツシモと共にこの香港の地を踏むことを約束して、機上人となった。

機内でマイケルと落ち合った澪は、パルマに着いてからの予定を聞かされた。

「まず、マツシモがいるはずのミラノ郊外の彼の友人宅へ直行したいんだが、

それでいいですか？本社へは既にその旨、連絡を入れておきました」
澪は最初に本社に行つて、ダニエラから仕事を引き継ぎ、落ち着いたところで、

マツシモを尋ねると思つていただけに、予定を聞いて驚いた。

驚きの顔を隠せない澪を見たマイケルは、笑った。

「マツシモが言っていた通り、あなたは無防備な人なんですね。

彼はあきれながらもうれしそうにあなたのことをこう言っていたんですよ。

“ 澪は人を疑うことを知らない。だからどんな人にも体裁を作らないし、

異性を前にしても下手に繕うことができない。簡単にいえば喜怒哀楽を

隠すことなくそのまま出してしまふ。例え自分が不利な立場に立つても、

お構いなし。純粹すぎる…。だから心配で仕方がないのさ” って。

今も僕に驚きの顔を隠すことなくまともなぶつつけてきたね。

そんなあなたを天はよく見ている。あなたの性格に見合った仕事を

与えて下さった。

しかも、天性からの企画力をフルに発揮できるこの会社をあなたに選ばせたのです。天の神に感謝しなければいけません」

そう言っておかしそうに笑った。半ば茶化して言われたことであつたが、

漣はまったくその通りだと、マイケルの分析に納得していた。

「話が横道に逸れてしまった。本題に入りますが、まず今彼が何を
して日々を

過ごしているのか、お教えしましょう。それとこの先、あなたのこ
とを漣って

呼ばせてもらいますがいいですか？あなたも僕をマイケルって呼ん
で下さい。

私たちの意思疎通の素晴らしいところを彼に見せつけ、

今回の訪問が如何に重要で且つ僕たちにとって必要かを

彼に認識させる必要がありますからね。それにはチームワークの
素晴らしいところを見せなければなりませんから。

まずは敬称なしの呼び方でなければいけません。

さて、マッシモの話に戻りましょう。会社に入る前の彼の職業は、
プロのスキーヤーだったのです。北イタリアのスキー場でスキーの
インストラクターをやって生計を立て、雪山に挑む男の憧れの世界
に生きて

いたんですよ。雪がなくなれば山歩きに興じ、道案内などもしてい
ました。

彼には今も北イタリアには多くの仲間たちがいる。だから会社を辞
めた後、

古巣に戻り、気心の知れた仲間たちと過ごすことにしたんだろうと
思います…。

山は自分らしさを取り戻すには格好の場所なのだと言っていたから。
それと漣にも雄大な山の景色を見せたいって言っていたな…」

眼下には夕闇に覆われた懐かしいミラノの街が見え始めていた。溼の心は複雑に揺れながらも、明日から始まる再出発のパルマでの生活と

山に籠っているマツシモに思いを馳せていた。

そして、昨日、今回のこの件は、先にマツシモの了解を得ない限り、会社に戻ることは出来ないから、と言ったマイケルの言葉が蘇った溼は、

友人を心から心配するマイケルの優しさだけではなく、

この仕事に対しての彼の周到な準備と真剣な心構えを改めて認識した。

ミラノ到着は時刻の七時を回っていた。十数時間のフライト時間はあっという間に

過ぎ去った感がある溼は、大した疲れもなく、宿泊するホテルのシヤトルバスに乗り、

マイケルと共にホテルに向かった。

空港近くのホテルであつたためにチェックイン後、軽い食事をマイケルと

共に済ませて部屋に入つたのは九時前という早い時間であつた。

ここまでたどり着くことができたのは、咲江の助言と香港で我がごとのように

心配してくれたアンディのお陰であることを承知していたから、マツシモと一年ぶりの再会が待つ明日を迎えるにあたり、

彼女たちに今の自分の素直な気持ちとこれまでのお礼を綴り、メールで送ることを考えた。

この先、どのようなことが起きるのが判らないだけに、ひとつの区切りを迎えた今日という日を大切にしたいと思っていたから、

シャワーを浴びた後、ベッドの上で持ってきたパソコン開き、

二人に私信を書き始めた…。

咲江にもアンディにも最後まで見守っていてほしいから、二人にいつまでもマツシモと自分の世界を見ていてほしいから…。幸せの季節に帰ることが出来るか否か、自分次第だから、見ていてほしい…と綴った。きつと甘えるなつて叱れることを想定し、

最後に追伸を添えた。

“私に愛をくれたマツシモとの再会の日を明日にして、心の動揺が激しく、情けないほど胸が痛んで…。どうしようもなく辛くて悲しくてたまりません…。

マツシモがこんな私を明日まで待っていてくれるのか、昨日まで愛していた

くれたのか…。これからも愛してくれるのか…。苦しみの中で私は喘ぐばかりです…。

でも、どんな結果であろうとも私はマツシモとの愛の世界に生きたいと思つて

います。どんな結果であつても私には香港での思い出があるから…。僅かな時間であつたけれど二人だけで生きた香港での時間があるから…、

だから耐えられます…。マツシモと共に僅かな時間でも生きた証しがあるから…”

第22章に続く

■第22章 ■ 愛の哀しみに・・・

■第22章 ■ 愛の哀しみに・・・

ミラノで一夜を明かした二人は翌朝、

マッシモが滞在しているボルツァーノへ向かった。

ミラノから急行で約一時間半後、列車の乗換駅である

ヴェローナに予定通り到着し、その後、二人は列車を乗り換えて
ひたすらマッシモの生きる村を目指した。

二時間後にはマッシモが待つボルツァーノに着くはずである。

ボルツァーノはイタリアのローカル色豊かな小さな村であるが、
オーストリアとの国境にあるブレンネロ峠にも近く、

世界的に知られるドロミテの東玄関口でも有名な山岳地帯である。

マイケルは車中、マッシモが駅に迎えに出ているはずだからと言っ
た。

日本を出るときにもミラノ着いた昨晚にも連絡を入れておいたから、
必ず駅に迎えに来ているから、となぜか何度も漣に告げた。

だからというわけでなかったが、漣は目的地が近づくにつれて、
胸の動悸が激しくなり、座席にじっとしているのがいたたまれなく
なっていた。

逢いたい気持ちと不義理をして去った悔いが交互に襲い、

どうしていいのかわかを見失いかけていることも確かだった…。

そんな漣を見るに見兼ねたマイケルは、

漣の膝に手を添えて静かに話した。

「彼はね、漣を連れて行くと聞いた時、最初になんて言ったと思う？
今日は漣の誕生日だって言ったんだ。電話は二日前だったからね。
そして、今年も一人で誕生日を香港で迎えるのは余りにも可哀相だ

から、

僕に誕生日を祝ってやって欲しいと言った。

僕はそれは断ったが、でも、うれしかったね。

マツシモがあなたのことをまだ愛していると判ったから…。

人間って勝手な動物だから、去った人のことは

時間が経つにつれて忘れてゆくものなんだ。でも、彼は違った。

僕は彼の純粋な恋心に拍手を送った。僕には真似のできないことだから。

だからなにも気にしないで逢うといい。

彼は一年前と変わってはいないから安心していい。

それと二日遅れの誕生日を祝ってもらうといい。

マツシモもそうしたいと思うよ」

小さな駅に到着した。ローカル色豊かな素敵な駅舎が目に入ったが、

漣はあえて前方を見ず、マイケルの背中だけを見て列車を降りた。

七月初旬のボルツァーノは涼しく、夏物のワンピースで降り立った

漣は、

涼しさに思わず肩をすばめたその瞬間、身体は後ろからジャケットに包まれた。

ジャケットの上から大きく優しい手が漣を強く抱きしめ、

懐かしいマツシモの声が耳元で鳴咽となつて聞こえてきた…。

漣も涙ですべてが見えなくなり、二人の世界に引き込まれていった。

「待っていた…。悲しいほど逢いたかった…。

いつだって寂しいよりも毎日が辛くて悲しくてたまらなかった…。

…しかし、逢えたのに悲しい。今というこの時間が悲しい。

どうしていいのか判らないほど辛い…。」

マツシモは涙でくしゃくしゃになりながら、振り向いた漣を今一度抱きしめた。

漣はそのとき、こんなに自分を愛してくれる人には二度と出会わないだろうと思った。

それに比べ自分の愛のなんとちっぽけなことか……。だから彼に言葉がなかった。

再会の悲しみの中でもがくマツシモに言葉がなかった…。

でも、勇気を出して漣はマツシモの顔を見た。涙の奥でしっかりと見つめて言った…。

「あなたをいつだって思い出して苦しかった…。だから私もあなたと逢うのが怖かった。

逢えたのにあなたと同じように悲しい…。どうしようもなく涙があふれてきて…」

マツシモも漣も愛を再確認する手段はお互いの苦悩を見せ合うことであつた

のかもしれない。悲しいまでも求めあつた二人の姿は、

そのままアルプスの山中に飲み込まれるかのように

透き通つた空間の中で、寄り添ってゆくのをマイケルは見ていた。

彼は一年振りに再会した二人の悲しみを看取つた後、駅舎を出て空を仰いだ。

夕闇の迫る北イタリアの小さな村の天空には、

昼の紺碧の空から今やマツシモと漣の愛のシンボルカラー

とも言える夕刻の茜色の空に替わる瞬間が訪れていた。

青から茜色に変わるその瞬間は、秀麗なグラデーションを描き、

一日の内で一番華やかで、一番寂寥感を漂わせる瞬間でもあつたが、その瞬間を村人たちは神様が演じる一大ページェントだからと言って、

尊厳さを強調し、誰彼となく自慢した。

今日のそれもいつもと変わりなく、ボルツアーノという村の天空は、
薄の訪問を歓迎するかのようにタイミングを見計らって
茜色の夕空を見せようと荘厳な雰囲気を出し、その準備を始めて
いた…。

第23章に続く

■ 第23章 ■ 幸せ色の予感

■ 第23章 ■ 幸せ色の予感

駅舎から出たマツシモは漣の手をしっかりと握り車に乗り込んだ。後部座席に座ったマイケルは、二人の泣きはらした顔を見て苦笑いをした。

二人の表情があまりにも真剣そのものだったから、笑うのは失礼と思ったが、笑いを押し殺すことができず、マイケルはマツシモに睨まれながら、しばらく笑っていた。

そして、車が走り出したのを機に、後部座席から二人に声を掛けた。

「まるで別れの時を迎えた恋人同士のような顔をして、なんてこつた。

しかし、こんなに愛し合っていたのになぜ別れたんだい？どうかしているよ。

僕には解せないね。別れなくてもなんとか術はあっただろうにね。とにかく、再会できたんだからだからもういいだろう。ここまでお膳立てをした

僕に感謝しろよ。ところでマツシモ、今日のホテルは確保してくれただろうね？」

「もちろん。でも、夏の登山シーズンだろう、どこのホテルも超満員。

だから二人の宿泊先は僕の借りている友人のバンガローになった。幸いにも二部屋あるから、なんとかなるだろう。

もっと早く連絡してくればホテルを確保できたんだけど」

マイケルは屋根があつてシャワーがあればどこでもいいさと答え、座席に身体をゆだねて、二人のために眠る気配を見せた。

マツシモはこれから向かうバンガローは、村の東側の斜面に面してあるが、周辺はワイン造りが盛んで、葡萄畑が一面に広がっていると、道すがら漣に説明した。アルプスを背にし、温泉地の近いこの村は、十九世紀初頭には保養地として、ヨーロッパ全土にその名を知られた村でもあると補足したマツシモは、漣が興味津津になってゆく顔を覗き込んだ。そして、山道に差し掛かったことで、握り締めていた漣の手を離し、両手でハンドルをさばきながら言った。

「やっぱり漣だね。興味を持つとすぐむきになって、今泣いていたと思えばもう真剣な表情で僕の話しに耳を傾けた。そして、中世末期の繁栄をしかと確かめようと窓外の景色を真剣なまなざしで見始めた。今、結構、面白い村だななんて思っているだろう？」

とにかく、三十路に手の届く歳なのに、子供みたいにも興味を抱き、学ぼうとする貪欲な性格は変わらないんだから。それでこそ漣だけだね」

そう言っただけを向いたまま漣の頭をそつと撫でた。

漣もうれしかった。マツシモはいつだって懸命に自分の興味を引きそうな

世界を提供してくれる、そのことがうれしく、変わっていなかったことも

幸せだった。そして、そのとき漣は、香港で最初に出会ったその時から、

自分に対する接し方は変わっていないマツシモに気づいた…。

それを機に、ずっと昔から彼とつながっていたのかも知れないと感じた。

初めての感覚だったが、自分との出逢いが運命的なものであった

にかもしれないと思ったのである。そして、それは瞬間に確信となり、漣を慌てさせていた…。

バンガローに着いた三人は、荷物をリビングに運んだ後、マッシモの指示の元で部屋割を決めた。といっても大げさなものはなく、

二部屋を客人であるマイケルと漣にそれぞれ与え、マッシモはリビングの

ソファをベッドにして一夜を明かすというだけのことであった。

そんな馬鹿げたことでも、久々に会った三人は、何やかやと言って、幸せの糸口を見つけ、現状より僅かでも幸せ色を色濃く塗り替えていった。

そして、今夜の決定打は、ディナーを漣の二日遅れの誕生会とする
と発表

したマイケルの突然の提案が漣を当惑させていた…。

この地に来てからというものの、僅か数時間であったが、マッシモの傍らに在る漣は、

常に予感のようなものが脳裏を駆け巡っていたから、
マイケルの提案も漠然としていたけれど、幸せ色のビー球が胸に掛けている

水晶の色を塗り替えて行ったような気がしていた…。

「実はね、今日は君たち二人の再会の状況を見てから

決めようとしていたことがある。もし、二人が今日という日を、

再び別れの日とした場合は、僕の案は流れたがそうではなさそうだから…。

もう決心しただろう？言ってもいいよね、マッシモ？」

ここでマイケルは一息入れ、マッシモと漣の顔を覗き込んだ。

「今僕は僕が介添えになってこの茜色の空の下で

結婚式を執り行おうと思っている。もちろん今から。

マッシモは多分、了解している。そうだろう?」

マッシモはうなずいた。うなずいて立ち上がった。そして、マイケルの部屋に

割り当てられた奥の部屋に入り、大きな箱を持って出てきた。

大きな箱は澪の前に置かれた。包み紙もない真っ白な大きな箱だった。

箱の周辺はまるで雲上の一角のように透き通った透明な空気が漂っていた。

それだけではない、マッシモと澪にしか見えない茜色の世界が広がっていたから…。

だから幸せ色の予感が澪を再び襲い当惑させていた…。

そんな澪の顔を見つめてマッシモは何かを言おうと構えていた。

澪は既に両親をはじめ咲江やアンディにこの歓びを伝え、分かち合っていた…。

北イタリアの一大ページェントの茜色の世界の中で…。

第24章に続く

■ 第24章 ■ マッシモの苦悩（前書き）

今日は第23章と第24章の2章をアップしております。よろしく
お願いいたします。

■第24章■ マッシモの苦悩

■第24章■ マッシモの苦悩

「僕と結婚してください…。一年前にも言っただけで、改めてポーズをする。

あの時は漑の身体が心配で咄嗟に出た言葉だった。君はそれをお見通しだったね…。

だから僕は無言のうちにプロポーズを断られていた。

嘘でなかったが、生涯を共に生きたいと心から思っただけで言葉ではなかったと、

漑がいなくなったことで気付かされた…。僕の心配を取り除くために漑を傍に

置こうとしていた。そして、僕は一人になった。寂しさはなんとか誤魔化すことができたし、

苦しみも吐き出せば一日はなんとか立つことができた。しかし、漑を失ったことで

生きることはできても生きる目的を失い、喜びも皆無になった…。

ただ単に生きることの難しさを知って悔やんだ。漑との時間が如何に大切だった

を気がつかなかった自分を悔やんだ。

仕事も漑なしではできなかつたし、悔やんだ…。

僕はこの一年間、ずっと漑に対してきたそれまでの

自分を戒めてきた。そして、マイケルに相談したところ、たまたま漑も

マイケルに会って僕の消息を知ろうとしていることを知った。

これは神様が少しでも僕を許してくれて、もう一度チャンスを与えてくれたと思った。

だから、漑が僕を許してくれるなら、僕を必要としてくれるなら、

僕と結婚してください…」

漣はマツシモの顔を見ることはできなかった。自分の今までのことを彼が代弁しているかのように思えたからだ。自分が過ちを犯したばかりに、

愛する人をこんなに長く苦しめ、悲しませてしまった…。

マツシモにそうではないと訴えたかったが、マツシモの目がそれを止めた。

漣の世界はマツシモなしで広がらないことを知っているからこそ、漣から逃げ出した自分が悪いと、目の中で漣に訴えた。

そして、漣に笑いかけたマツシモは言った。

「漣の言わんとすることは解っている…。だからもういい。幸せになろう。」

さあ、白い箱を開けてみて。開けたら僕たちの未来が広がるはずだから」

箱の中には白いウエディングドレスが入っていた。

そして、ドレスには茜色のスカーフが添えられている。

漣は感激の涙で見えなくなったドレスを手に取り、

マツシモとマイケルに深々と頭を下げた…。

涙が止まらないから、頭を上げられない漣をマツシモは抱きしめた。

外は既に夕闇に包まれようとしている。真っ白なウエディングドレスを着た漣は、

茜色のスカーフを手首に巻き、胸には水晶のペンダントをつけてマツシモの前に現れた。

長い黒髪に白いドレス、そして、茜色のスカーフの見事なコントラストに、

漣自身もマツシモも、そして、マイケルもその清楚であまりにも優しい美しさに見惚れた。

漣をイメージして用意したマツシモにもその際立つ美しさは想定外であつたが、

哀しいほどに花嫁を憂くしく仕立てた白いドレスと茜色のスカーフは、

漣自身と共にボルツアーノの清新な空気の中でこそ、

本領を発揮していたことに、マツシモは気がついていなかった…。

マツシモは泣き出しそうな漣の顔を両手で包み込み、長いキスを交わした。

そして、改めて漣を見つめ感謝した。

「…ありがとう漣。こんなに美しい人が今日から僕の伴侶となつてこの村で生きていてくれることに心から感謝している…。漣ありがとう」

マツシモとマイケルはラフなジャケット姿であつたが、漣の一番好きな

丈の長い細身のジーンズと紺色のジャケットを身に着けたマツシモがいた。

香港で初めてデートをしたあの日のマツシモが目の前で笑って立っている…。

アルプスの燃えるような茜色に染まつた残照が、

漣とマツシモを祝福するかのようにバンガローの窓越しに入ってきた。

それを機に今夜の儀式を演出するマイケルは、二人を部屋において外に出、

再会が上手くいったことに胸をなでおろし、

山間に沈もうとする洛陽に二人の末長い幸を祈つた…。

アルプスを背に二人はマイケルの介添えで生涯の伴侶としての誓いをたてた。

キャンドルのほのかな明かりに照らし出された漣は、妖精のようで、マッシモだけではなく、マイケルも思わず声をあげたほど美しかった。

十分ほどの結婚のセレモニーを終えた三人は、着替えを済ませてリビングにくつろぐと、それを待っていたかのように、マイケルが話し始めた。

「マッシモにはまだ詳しい話をしていないが、実は今日、ここに来たのは

二人の結婚の介添え以外に、これから始めようとする仕事の話をするのが目的だ。

今後のことをパルマに戻る前に決めておかないと、君たちは会社に戻るにも

戻れないからね。だからマッシモと漣と僕とで話を煮詰めたと思っている」

マイケルはそう言って用意してきた書類を出した。

しかし、マッシモは焦りながらマイケルの顔を見、目の前にある書類に

手をかざして拒否を示してから言った。

「マイケル、申し訳ないが僕は会社に戻る気はない。今更戻っても仕方ない。

もう僕の役目は終わっているから、戻っても仕方ない。ただ、漣は判らない。

未だに会社が必要であれば、また、彼女に戻る気持があれば、それはそれでいいと思う。彼女の力量は僕の比ではないからね」

漣はマッシモと組んで再度あの仕事に打ち込めると思っていた矢先、彼の言葉にショックを隠せなかった。

どうしてなの？なぜ、前のように仕事を一緒にできないの？

マツシモは声のない愛する人の質問に答えようと努力をしていたが、その世界に入り込めず、焦った…。一緒に仕事ができないのではない、

と言いたかったが、ショックを受けた澪の心に近づくことができず、言葉を発することも出来なかった。

冷たいほどに自分との仕事を拒否したマツシモの姿に接した見た澪は、

図らずも一年前のあの日のパルマの夜の悪夢を思い出した。

二度とあの日と同じ過ちを犯したくなかったから、澪は、

少しずつ痛み始めていた心の扉を硬く閉じ、目をつぶった…。

そして、咲江の顔を脳裏に描き彼女の助言を求めた。

“咲江、マツシモの気持ちは痛いほど解るけれど、でも、この先どうしたらいいのか

私には解らない…。会社とマツシモ…私には大切なものだからこそ…。

大切なものだからこそ私は考え抜かなければならないの…。助けて！お願い…”

第25章に続く

■ 第25章 ■ 自分を信じて…

■ 第25章 ■ 自分を信じて…

二人の困惑を目の辺りにしたマイケルは、澪の手を取り、大丈夫だからと

言いたげにうなずいた後、顔をマツシモに向けた。

「どうしたマツシモ…。汚名挽回もそうだけれど、澪と手を取り合
つて

できる数少ない仕事のひとつなんだ。二人の二人三脚が功を奏す仕
事だって

認識をしているんだろう？こんなチャンスは二度来ないと思うし、
会社にとってもプラスをもたらすビッグチャンスなんだ。

君の仕事への意欲はまだあるのかと思っていたが、

僕の勘違いか、あるいは僕の先走りすぎなのか、とにかく、断る理
由を

もう少し詳しく聞きたいね。その理由如何によつてはマツシモの辞
退は

承諾し兼ねるかもしれない。そのときは強引かもしれないが、
会社に戻ってもらう。とにかく、三人ともお互いに、

とことん納得行くまで話し合わなければならないようだ…」

そう言つてマイケルはソファから立ち上がり、

暗くなったボルツァーノの空を窓越しに覗いた。

マツシモの決意はマイケルの半ば脅しのような言葉に揺るぐことな
く、

誰よりも落ち着いた態度で、マイケルの背中に声を掛けた。

「今から僕の気持ちを話すから、ここに座つて…。もちろん、
澪にも聞いてほしいし、なぜ僕が会社に戻りたくないのか、

僕の話聞けば二人とも理解できると思うから…」

「… 漣は僕という人間がいたから仕事が進んだと思っているよね？」

でも、それは違う。そうじゃないんだ。君をパルマに呼び寄せ、プロジェクトを立ち上げたのは僕だけれど、企画をし、細部に渡って計画を練った漣がいたからこそ出来たことで、

僕はほんの少し手伝っただけだ。その証拠にあそこまで

進んでいた仕事が、漣が居なくなっただけで、挫折したんだよ。

つまり、僕ではできないんだ。僕がいてもなにもならないんだ。

無駄な出費を会社にさせるだけだ。そうだろう？

僕だってこれ以上役立たずの人間のレッテルを貼られたくない。

仕事はできる人がやるべきだ…。僕はしばらくこの村で暮らしたい。少なくともここには僕を必要としている人がいるから…。

ただ、結婚したからには漣と一緒に暮らしたいと思う。

でもね、漣、君には仕事の天分があると思う。

仕事に対する態度が他の人と違うし、真っ直ぐな性格だから、どんな仕事でもベストを尽くし懸命に働く…。だから結果はいつもすごい。

僕はそんな漣にぞっこんだった…。自分のことのように誇らしかった。

ただ心配なのはそれゆえに心身が疲れていても君は気がつかない…。立ち上がれないほど身体を酷使したとき、初めて気がつく…。そんな漣を見たく

なかったから、パルマでは…。でも、今は違う。漣が納得するまで仕事に生きれば

いいと思う。僕が君を精神面で極力フォローするから…。

でも、問題がひとつある。僕の考え通りになれば、漣と再び離れなければ

ならないことだ…。と言っても別居だけれども…」

マイケルはマツシモの言い分を黙って聞いていた。

理解し難いという顔つきであったが、漣はマツシモの考えも言い分も理解できていた。

しかし、理解はできても複雑な思いからは離脱できないでいた。

その思いのひとつは会社の仕事が始まれば、マツシモの言う通り、一年振りに逢えたマツシモと再び別れなければならないこと。

漣には耐えられない難題だった…。二つ目は、共に暮らす結婚生活をするために、この村に居続けるとしたら、本社での仕事はできず、だからといって一年前にプロジェクトから離脱したために、

会社に損害を与えた自分だから、少しでも取り戻させなければ、マイケルにも社長にも申し訳が立たない…。

漣は思案した。ほかに道はないのかと考えた。沈み込んだマイケルを見ながら、

そして、苦渋の選択の苦しみで涙で潤んだ目をしたマツシモを傍らにししながら、

漣は必死に考えた…。誰もが言葉を探している間、懸命に考えた…。冷静さを保つ自分が不思議だったが、二つの難題に挟まれた漣は、しっかりと現実を見据え、思案していた。そして、窓辺から月明かりが

差し込んだそのとき、漣は難題の解答ではなく、なぜか咲江の言葉が脳裏に蘇った…。

「仕事も愛も両方手に入れることは可能なのよ。でも、あなたは両者とも自分のわがままで手放したのよ。

でも、今からでも間に合う。あきらめては駄目！策はあるはずよ。原点に戻ってもう一度思案するの。漣の足元に転がっているかもしれない。

考えて考え抜くの。漣の頭脳だったら必ず策を見つけるから。自分

を信じるの！」

咲江の言葉の中を彷徨していた澪の顔に赤みがさしてきた。

新しい道が少しずつ見えてきたように感じたからだ…。

策が思い当たったかもしれないと澪はその道の先を恐る恐る覗いてみた…。

期待通り先にはほのかな光りがあつた…。あまりにも不自然な気がしたから、

首を傾げそうになったが、咲江の叱咤の言葉が再び脳裏を横切った。

“自分を信じるのよ！”

マッシモとマイケルに今見えた新しい道のことを話そうと身構えた。何か案が生まれそうという予感だけであつたけれど、それだけでも話そうと思つた。いつも話している間に閃きを感じる自分であつたことを

思い出したから、口したその時から何かを企画し始める自分の癖だつたから、

だからマッシモとマイケルに話そうと思つた、そのとき、

運悪くバンガローのドアを誰かが激しくノックした。

マッシモは誰か判らぬまま首をひねりながらドアを開けた。

ドアの前にはマッシモの隣人たちが手に手にプレゼントを持って立っていた。

何人もの隣人たちがマッシモのバンガローに入つて来たのを見届けたマイケルは、彼らと入れ替わりに外に出て、密かに電話を掛けた。

「ダニエラ、ありがとう。連絡してくれていたんだね。皆来るのが遅かつたから、

もしかして今日の祝いには来てもらえないのではないかなって思つてた。

それにしても君の友人たちがこの村にいたなんて、世の中狭いね。

大成功だよ。サンキュー。お礼は後でたっぷり返すから！
マツシモ？ううーん、思わぬ伏兵に阻まれてしまったね…。もちろん、
まだ結論は出ていない。でも、なぜか漣に、いいや、吉野さんに期待している
自分があるんだ…。彼女の傍にいとすごい気迫があつて、もしかして、
現状を打破してくれるんじゃないかって期待してしまう自分がいた…。
彼女のオーラ？っていうのかな、マツシモが常に言っていた彼女のすごさを
今初めて判った…。マツシモが漣という女性の世界を独り占めしなかった
理由が初めて解った…。なぜここまで大切にしてきたのかも、なぜマツシモは
自分の気持ちを犠牲にしてまでこの人の世界を保護してきたのか…」

第26章に続く

■第26章 ■ 二人三脚

■第26章 ■ 二人三脚

マツシモの隣人と友人たちは口々に二人の結婚を祝福しながら家の中に入ってきた。

「結婚おめでとう。でも、どうして事前に知らせなかった？水臭いぞ。」

でも、祝いの席にはどうやら間に合ったな。奥さん、支度は結構ですから。

予告無しで祝宴に参加させてもらう代わりに、参加者全員、料理二品以上と飲み物を持参することを条件にしましたから。

といっても急なことでしたから、持ってきたものはすべて自家製品。花嫁の口に合うかどうかは判りませんが、

皿の数だけはあふれるほど集まったようです。

今夜はこれで祝いの宴をやりましょう」

澪は突然、奥さんと呼ばれたことが恥ずかしかったが、

しかし、今、こうして夫と呼べる人の友人たちに囲まれ、

温かな時間の流れの中にいる自分が信じられず、

しばし他人事のように遠くから見つめていた。

マツシモに紹介された後、澪は持ち込まれた料理や飲み物を

友人たちの手を借りて順にキッチンに運び、すぐさま、

いくつもの皿に北イタリアの手作りの家庭料理を並べ出した。

色とりどりの料理には澪の知らない珍しいものも多く、興味を

そそられるものばかりであった。

キッチンに来て手伝い始めたマツシモは、そんな澪の様子を感慨深げに見つめた後、料理を並べながら何気ない振りをし、彼なりのこの地方の料理やワインの蘊蓄を話し始めた。

まずボルツアーノ周辺の気候や季節の移り変わりの特徴から、丁寧に説明を始めた。次になぜこの地は赤ではなく白ワインを主に作るのか、なぜこの地が牛や羊の放牧には格好の場所なのか、興味深げに耳を傾ける澪を知っていたから、マッシモは間違いのないように、

ミスのないように料理の歴史までも蘊蓄を聞かせた。

料理を彩りよく、手際よくいくつもの皿に盛りつけながらも、澪の心は

マッシモの説明の言葉に奪われ、一句も聞き逃さないよう、必死に頭の中の

メモ用紙にマッシモの言葉をなぞっていた…。

そうなることを先刻承知していたマッシモだったから、うれしそうにまるで澪を

からかっているかのように、次から次へと話を弾ませ、リズムに乗るように、

軽快に話を続けた。そして、最後は澪がもっとも好きな

この地と芸術の歴史を紐解いて終わった。

マッシモの講義をもらさずメモをしながら、皿に料理を盛り付けていた澪は、

各家庭のオリジナル料理の多彩さとワインの味が

少しずつ異なることに気づいていた。同じ地に生きながら、

家によりこうも多彩な味付けや料理方法のあることに着眼した澪は、突然、手を止めてマイケルをキッチンへ呼んだ。

マイケルが来るとマッシモと共に椅子に座るように促した澪は、

話したくて焦る気持ちを一旦落ち着かせ、深呼吸の後、口を開いた。

「二人ともよく聞いて。さっきの私の答えなの。仕事に対しての答えなの。」

「マイケル、私もマツシモ同様にパルマには行きません」
漣の言葉を聞いてマイケルよりもマツシモの方が慌てた。

「どうして？ 僕と別れて暮らすことがネツクなんだね？」

僕だって同じ思いだけれど、でも、漣は仕事をするべきだし、その決断は漣らしくない。どうしたの？

パルマとこの村と離れて暮らしても僕たちはもう大丈夫だ。

それにウィークデーだけパルマで暮らし、週末はここに帰って来るって

いう方法もあるし、その逆で僕が週末をパルマで過ごすことも可能だ」

漣は少しだけ笑って、二人にショックを与えてしまったことを謝った。

「ごめんなさい。唐突にこんなことを言えば誰だって驚くわね。マツシモ、そうじゃないの。私はここにいないければいけないの。

ここでの仕事をたった今、見つけてしまったの。

新しく見つけてしまったから、だからここにいないければいけないの」
そう言ってマイケルをテーブルの前に立たせた。

テーブルの前の料理や産物を前にした二人は、

漣が見つけた仕事がどんなものなのか、漠然としていたが予測できた。

マイケルは相手に納得させられたときに、悔しさも含めてその心情を誤魔化すために頭を掻く癖があったが、今正にその時とばかり、頭を掻きながら、たった今始まった無二の親友夫妻の二人三脚の旅がうれしく、心の中で喝采していた。

“なんてこった！ 俺の心配などどこ吹く風だった。しかし、これは会社にとっては

ラッキーなことになるかもしれない。じっくりと澤の新企画を聞かせよう”

第27章に続く

■ 第27章 ■ ボルツァーノの朝焼け

■ 第27章 ■ ボルツァーノの朝焼け

二人を前にした漣は、リビングで待つ客人たちを忘れていることに気がつき、

キッチンのガラス張りの窓越しに目をやると、彼らも何事が起きたのかと、

ドアを開けて入ろうとしていた。漣はマッシモに助けを求めると、マッシモは客人たちを手招き、漣を囲むようにして並べせた。

そして、漣に目配せをして話を続けるように催促をした。

彼らが持ち込んだ料理やワイン、ジュース、チーズ、そして、瓶詰めの野菜、

ジャム、生ハムなどを目の前にしたお陰で、漣の頭は新企画の案でいっぱい

になったことをマッシモは友人たちに知らせたかつたし、感謝もしたかつたから、

キッチンの立見席ならぬフロアいっぱいに友人たちを招いた。

マッシモの彼らへの心遣いを無言のうちに悟った漣もこの先、

ここの居を構える自分たちとは、少なからず時間を共有する彼らであるが、

仕事となるかもしれないこの企画に参加してもらったためにも、今話を聞いておいてもらえば、より効果的な結果を得ることができるのではないかと思っていた。

「皆さん、少しだけお時間を下さい。どうしても今のこの時間と皆様が持参してくださった

この料理が私には必要なのです。私がこの村に住むためにも必要な

のです」

彼らにそう断った澪は、深呼吸をしてからマッシモとマイケルに話し始めた。

「ほらこのテーブルの上の料理を見て。すごいと思わない？」

すべて村人たちの自家製なのよ。各家庭によってすべて味も雰囲気も異なる料理なの。

もちろん、各々の家庭の味は異なるのは当たり前だけれども、

それとは違うの。そういう微妙な違いではなく、大きく異なるの。つまり料理方法が異なるの。

ローマでもミラノでもナポリでも味わえないものばかり。

同じ材料を使ってまったく異質な料理方法でまったく異なる味付けを同じ村の中で、お隣同士でやっているの。そんな村はそうそうないと思うけれど。

しかもそれだけではない。オリジナリティに富み、この地の風土や気候に合わせたことで、保存性もかなり高いと思われるの。私はそこに着眼した…。すごい発見だと思っている。

それとマッシモの説明でどうしてそんなバラエティに富んだ料理がこの村に

存在しているのか、それも判ったから、私はこの村で彼らの料理を学び、

仕事につなげたいと思っています。といってもまだ、頭の中での企画でしかないけれど、極力早く、まとめるから、二人とも協力してほしい…。」

マッシモは一年ぶりにはつらつとした澪の姿を初めて見た気がした…。

一年前に香港で逢ったときより一回りも大きく感じたからだ。

苦しみを肥やしに成長したのかもしれない、そう思ったマッシモは誇らしげにマイケルにウインクを送った。

これぞといった企画に出会ったときの漣の顔は、人前であろうがなかろうが、

恥かし気もなく子供のように顔を高潮させ、赤ら顔で生気を体中にみなぎらせるから、安定感を失ってしまつて、時には身体がよろめきもするが、

そうなたらもう誰も寄せ付けられない漣だったから…、

マツシモはいつだって見守るしかなかったが、今日の漣は少しだけ違っていた。

身体が揺れだすとマツシモに手を伸ばし、自分から支えてほしいと言ったからだ…。

自分の世界に埋没しているにも関わらず、今までと違っていたのは、その世界にマツシモもいることであつた。一緒に生きていたことが違つていた…。

マイケルも初めてみる興奮した漣の姿であつたが、彼女の気迫から想像できたことだけに、マツシモの言葉なき言葉に同調し、ウインクに対してうれしそうにうなずいた。

客人たちをリビングに戻し、マツシモとマイケルに手伝ってもらつて、

祝宴のテーブルを用意した。そして、皆の祝福を受け、

新郎新婦はシャンパン攻めにあいながら、

ボルツアーノという小さな村で幸せの時間を隣人たちと共有した。

そして、真の幸せは二人だけで奏でるセレナードでないことを、

漣はこのとき初めて知つた。共有する人が多ければ多いほど

その歓びは増し、正比例してゆくことも知つた。

歓びを分かち合う人が多ければ多いほど、

自分に返ってくる幸せの度合いの多いことも知つたのである。

それは物を売ることに共通するものであることを再認識した漣は、新しい企画がこの村で生まれたことは、当然のようにも思っていた。なぜなら人間性豊かな隣人たちであるからこそ、誰彼となく区別を

しないで
隣人を愛する人々だからこそ、これほどまで感動させる料理が生まれ、
産物が誕生したのだと確信したからであった。

祝宴が終わり、片づけを明日に持ち越してリビングにくつろいだ三人は、
赤々と燃えるマントルピースの薪を前にして、再び澪の話に耳を傾けた。

既に茜色の夕刻時は過ぎ、遅い漆黒の闇が訪れた後、
清新な空気を保った村の天空には無数の星が散りばめられ、
満天の星となって澪の心に光を降り注いでいたから…。

それは新企画の話に夢中になっている澪を応援するかのよう
に、光を絶やすことなく輝きを懸命に放っていたから…。

そして、友人たちを送り出し、マイケルと三人でマントルピースの
前に

くつろいだときには、夜が明け始め白々とした優しい光が窓辺から
差し込んできたから…。

だから、澪の話は途切れることなく、朝焼けの時間が来るまで続
いていた。

第28章に続く

■ 第28章 ■ 天空への祈り

■ 第28章 ■ 天空への祈り

寒さで身体が冷え切っていたが、溼の高潮した顔は冷めることがなく、
熱く燃えるような目でマツシモとマイケルに語り続けられていた。

「ここはオーストリアの国境やドイツに近いこともあって、
ドイツ語を話す人が多くいるって聞いていたし、

ここへ来るまでに村の各所でドイツ語の看板や表示を見たの。
そして、さっきのマツシモの料理に関する話を聞いていて、思った
の。

中世から、いいえ、もっと以前からかもしれない、ここはイタ
リア人だけではなく、

周辺の国々の人々が昔から出入りし、いつしかその人々がこの地に
永住するようになったのではないのかと。他国に囲まれた国が
そうであるように、この国も複数の国境があったでしょう？

だから他国からの侵入者は日常茶飯事的にあったと思える。

イタリアに入国した人の僅かパーセントにも満たない人々かもし
れない、

この地を離れることなくそのまま住み着いたために、

その人々の母国の料理がこの地にもたらされ、長い間にはボルツァ
ーノの

風土に合った料理法が加味され今のようなオリジナリティに富んだ
ものとなり、ボルツァーノの郷土料理として発展してきたと思うの。
だから料理もドイツ名物のソーセージやイタリアの生ハムなど薫製
品を主に、

リンゴや柑橘類の料理もここにあるわ。とにかく、このテーブルの

上には、

ボルツアーノのだけにしかない固有の料理がいっぱいここにあるの。それと今取沙汰されているスローフードの世界がここにはある。

だから、今私はこれらをなんとか製品化して売り出したいと思った。今、ひらめいたばかりだから、なんともいえないけれど、北イタリ
アの

地方文化を加味して、多くの人々に売り出す方法を考えたいと心から思っているの」

漑はなおも続けようと深く息を吸い込み、水を口に含めた途端、マッシモが立ち上がって漑を抱きしめた。

「漑、もういいよ。この辺でお開きにしよう。ミラノからこっち、漑もマイケルも休むことなく動いていたし、眠る暇もなかった。

これでは身体が持たない。マイケルもこれ以上漑に話させないでくれ。

前の漑に戻ってしまった。彼女はひらめいたら、次から次に案が出てくるんだ。

機械仕掛けのように止まらなくなる。それが漑の才能だろうと思うが、

仕事に夢中になっている間、彼女は心身が疲れていることに気がつかない。

一年前に、仕事に夢中になったばかりに、疲労が溜まって身体を壊した。

課題が多く重責だったこともあてストレスから解放されることもなく、

いつしか精神もずたずたになっていた…。チーム頭だったことでこの僕にもその

苦しみを打ち明けられず、ひとり病と闘っていた…。さぞかし辛かっただろうと思う。

だから僕は漑に同じ過ちを犯させたくないし、二度とあの苦しみの

世界に彼女を

追いやることはできない…。明日という日があるんだ、もう今夜は辞めよう。

といつてももう朝だね。…やはり漑が仕事をするには僕が必要だ…」マツシモとマイケルは新たな問題提起をした漑を見ながら、同時にため息を

ついていた。とはいってもマイケルの気持ちは既に固まっており、疲れきった顔をして漑を抱きしめているマツシモに言った。

「今即答はできないが、漑の新企画の方向で話を進めてみよう。本社からどういふ返事が返ってくるかは判らないが、具体的な案として

まとめたものを、改めて会議に掛けられるように段取りをしておくから、

漑はマツシモの元で彼の協力を得て、企画を大至急まとめてほしい。漑ファンの社長の期待を裏切らないような企画にしてほしい。そうなれば

二人の思惑通り、というより願ひ通り、この村で結婚生活をエンジョイできる」

漑はバンガローの外に出た。ボルツアーノの朝焼けを見るために…。目の前にした光景は、漑に夢の世界なのではと思わせるほど、荘厳な雰囲気

を漂わせた雄大な光景が広がっていた。それは

まるで巨大なスクリーンを目の前にしたかのように、

薄黒い夜の帳の幕が開き、少しずつグレーから茜色に、

そして、碧い色に変わるための前奏曲が奏でられていたからだ。

漑の目の前で一瞬の間ではあったが、

曲はいつしかグラデーションとなって天空に広がり、

代わってアルプスにこだまする朝焼けの曲が茜色に変わり、

ボルツァーノの村を静かに包み込み始めた…。

グラデーシヨンと化した曲は、まるで明けゆく大空の賛歌のように、神々しく神秘的で幻想的でもあった…。

その光景に身も心も奪われた澪は、天空に向かって思わず手を合わせていた…。

“ マイケル、ありがとう…。ありがとう、咲江…。本当にありがとう… ”

第29章に続く

■ 第29章 ■ ハイジの世界に

■ 第29章 ■ ハイジの世界に

漣とマツシモはボルツアーノに永住を決意したことで、二カ月後、飯の住まいであったバンガローでの生活を終わらせ、

ドロミテの山裾に新居を構えることにした。

新居といっても牧草地を前にして立つ山小屋を

無償で友人から貰い受けたことで、敷地内に隣接して小さな家を建てるといふ

計画であった。もちろん、山小屋は内外からやってくる多くの登山家たちの

道標としての役目を存続させることで、二人は管理人としての新しい役目も担った。

新居が完成するまで再び、山小屋での飯住まいを始めなければならぬことを、バンガローの持ち主であるマツシモの友人が心配し、

雪解けが始まる来年の初夏まで現状のまま生活したらどうかと、勧めてくれたが、マツシモは山小屋での管理人としての仕事があるから

といって、漣を伴って十二月の末、バンガローを後にした。

雪に覆われた厳寒の世界であったが、ボルツアーノ圏にあるそこは、四駆の車での往来が可能であったこともあり、

二人はなんら心配もなく、新しい環境の中に身をゆだねた。

そして、新居の建設は雪解けを待たず、翌年の春先、始まった。

足場が悪く建設時期には向かなかったが、本格的な山登りのシーズンを迎える初夏前に大半の建設を済ませておきたいというマツシモの希望で始められた。

建設といっても業者に依頼するというようなものではなかった。

マツシモの仲間や隣人たちがが家作りの材料を安く調達し、

お互いの時間をやりくりしてし、少しずつ建設を進めてゆくというもので、

都会では考えられないことであるが、この村では当然のこととして、かつて今も、村人全員が協力し合って家作りをすることは、

なんら珍しくもなかった。また、建築に携わった仕事をしていなくても、

家作りのノウハウを代々子孫に伝えていることから、

村の男性の大半は家作りを心得ており、古い家には中世

の大工道具一式が今も保存されている。

ただ、今は昔と異なり、設計はパソコンで3Dを駆使できる若者に頼み、

資材の必要量もパソコンではじき出せることで、段取りは早く、時間もお金も何もかもが合理的に進んでいた。

また、村人の中には、マントルピースを作った既に40年という

ベテランやレンガ造りが三度の飯より好物という炭焼き小屋の

マルコなどその道のパーソナリティも多く、家の内装にもなんら不足はなく、

問題も起こらなかった。毎日、僅かな時間でも手が空けば駆けつける仲間たちを目の前にした澁は、彼らの結束の固さに目を見張る思いがあり、

なぜそこまで他人のために尽くせるのか、と日々思い考えていたが、雪に閉ざされた真冬から雪解けが間近な春までをこの地で過ごした澁は、

初めての経験の中から、澁なりの結論を見出していた。それは、中世の昔から、過酷な気象条件の中に生きるからこそ、

お互いに助け合わなければ、生きながらえなかったのではないのか

…。
隣人であろうが余所者であろうが、肩を寄せ合い、家族と同様に信頼し合い、
厳しい自然条件の中で、力強く生き抜かなければならなかったからであろうと思った。それがこのボルツァーノなのであると再認識もした。

漣は新婚生活の中で、マツシモに誘われるまま何度か山歩きに挑戦した時、
まるでおとぎの国のハイジの世界のようなのかな山間部を見たことで、

漣の果てしない夢がいつしか大きく育っていた…。
それはカウベルを鳴らしながら、牛や羊たちが戯れる高原で、一面に敷かれた緑のじゅうたんの上を走り回る少年や少女ハイジの世界に自分を置くことであつた…。

だから、マツシモが仮住まいから解放されたいと言いつ出した時、ローカル色を思いきり出した家を建てたいと言つた時、ドロミテの山裾のあの高原に家を建てたいと言つた時、それもハイジの世界に相似した夢の家を建てたいと言つた時…。
そして、それが今叶おうとしていることを知つた時、
漣はもしかして夢ではないのかと疑つたほどであつた。

手作りの家の計画が始まり、山小屋に毎日多くの仲間たちが訪れるようになると、
なぜかそれを機に次から次へと協力者が現れ、二人を驚かせた。
そして、半年後の初夏、折りしも漣の三十歳の誕生日前日に、山小屋の隣に母屋と納屋が完成した。計画より二ヶ月も早い完成であつた…。

■第30章■ 夫の祈りに…

■第30章■ 夫の祈りに…

澪の企画で始められたボルツァーノを舞台にして始められた仕事は難を極め、

悪戦苦闘を強いられていた。生みの苦しみという厳しい現実の中に身を置いた澪は、突破口となるはずの一筋の光を求めて日々戦っていた。

しかし、それとは裏腹にマッシモの妻として生きる日常は幸せで、共に生きる愛犬ビリーとその子供たちと過ごす平和な日々があった。そして、六月の初め、マッシモの毎年恒例となっている初夏のアルプスを

散策する彼について歩こうと予定していた澪は、早朝三時に起床し、二人分のランチボックスを用意した。持参する日本茶もポットに入れ、

すべての準備を終えた後、玄関先まで出て同行する犬、ビリーの準備をするために犬小屋に向かったマッシモを待った。

周辺はまだ暗く足もとが危なかったが、朝の空気を思いっきり吸いたくなり、澪はポーチまで出てまだ暗い空を仰ぎ、

深呼吸をした。しかし、背伸びしすぎたのか姿勢が崩れ、体が揺らいだ途端、朝露に濡れていたポーチに

足を取られ転倒してしまった。

いつもはおとなしく命令には背かないビリーが、マッシモが犬小屋に入ったその時、

戸が開くのを待っていたかのように、勢いよく外へ走り出した。

マッシモは今まで命令に背いたことのないビリーの思いもかけない背信行為に、

腹立ちながらも何かことの起きたことを予感し、すぐさまビリーの後を追いかけた。

マツシモの声に振り向きもしないで一直線に母屋に向かうビリーの姿は、

いつもとは異なり、悲壮に満ちた泣き声を口しながら走っていることに気づいた

マツシモは、母屋で自分を待つ澪の身に何か異変が起きていることを知った。

マツシモが母屋に着いた時には、既にビリーはポーチに横たわる澪の傍らで

涙を流して立ち尽くしていた…。声もなく大粒の涙をポーチの上に流していた…。

そして、マツシモが来たのを機に、前足をそつと澪の身体の横に置き、

身体をすりよう競るような素振りですり込み、澪に暖を与えた…。澪もビリーと同じく声はなく、真つ蒼な顔をしてお腹を押さえていた…。

マツシモはビリーに澪を頼み、取り乱しながらも携帯で救急車を呼んだ。

澪の身体を毛布で包み、動かさずにビリーと共に救急車の到着を待った。

救急車が来るまでの間、ビリーは一時も澪の傍を離れず、うめき声にも似た悲痛な叫びで澪の苦しみを嘆き悲しんでいた…。

マツシモもまだ明けぬアルプスの大空に向かって澪の無事を祈っていたが、

ビリーの祈りはそれ以上で、朝まで我慢していた用足すら済ませることはなく、

救急車のサイレンが鳴り響いた途端、安心した弾みで澪の傍らでお漏らしをしてしまった…。マツシモは涙ながらにビリーに言った。

「漣が心配なんだね…。そんなに心配だったんだね…。ありがとう。でも、ビリーの
お陰で漣は助かったと思うよ。ありがとう。だからもう我慢してはいけない。
膀胱炎にでもなったら、今度は漣が心配するから。さあ、おしっこ
をしておいで」
しかし、ビリーは救急車に運ばれる漣を見送るまで、用足しはしなかった…。

病院に運ばれて三時間後、マッシモは医師に呼ばれた。
確かアルドという名前だったとマッシモは医師の顔を見つめながら
考えていると、医師はマッシモに笑いかけて

「君は確かマッシモ・ペリオ？だよね。久しぶりだから名前を…。
僕はアルド。奥さんはどうやら妊娠しているようだ。産婦人科の医
師に

ちゃんと診察してもらわないと確かなことは判らないけれど、
しかし、妊娠は本物だ。三ヶ月前後というところかな。しかし、も
しそうだと

すると、一番大切な時期に転倒事故を起こしたわけだから、
危ないところだったね。ビリー君と山歩きの専門家である君の機転で
最悪の事態を逃れたようだ。母体も赤ちゃんも大丈夫だろう。ただ
し、

出血をしたので、一週間ほど入院して様子を見なければならぬ。
今後、山登りや過激な運動は二世誕生まで厳禁だからな」

漣が三十一歳を迎える一ヶ月ほど前のこの日、
マッシモは漣の身体に自分の子供が宿っていることを知った…。
病室に行くと漣は恥ずかしそうに笑った。

笑ってマッシモの手を取った瞬間、泣き出した。

「どうしたんだい？泣いたりして…。こんなおめでたい日に…。

ただ、知らなかったとはいえ、妊娠している澪をこんなに苦労させて…。

これから僕が澪の分、頑張るから休養していい子を生んでほしい…」
澪の仕事が軌道に乗らず、新天地で金銭的な苦労も味わっていたから、

マッシモは澪を哀れに思い始めた矢先の妊娠だったから、

マッシモは二世誕生の喜びよりも澪の身体が心配でなかった。

このまま仕事を続けさせていいのか否か、この日からマッシモの惑いが

始まったが、一週間の入院を終えた澪は、二世誕生までに少しでも新しい企画の道筋を決めておきたいと願い、夫の心配を他所に、今まで以上に自分の世界に没頭した。

なぜなら後一步で澪の求める第二の世界に手が届くことを知っていたから。

もう少しで何かが掴めるという予感があったから…。

折角のチャンスが無駄にしくなかつたから、今まで築いてきた自分の世界を

守り通し、次の世界へのステップに作り上げておきたいと思ったから、

マッシモに背を向けてまで頑張っている澪がいた…。

最終章に続く

■ 最終章 ■ 奇跡に賭けて

■ 最終章 ■ 奇跡に賭けて

妊娠が判明した溲は、身重であることに甘えず、今まで通り仕事にも家事にも懸命に向かった。

案こそあったが、マイケルや社長を魅了するほどの企画にまとめられない

自分を諦めなかったし、苦しい時間の中で少しでも光を見出せば、それをすぐり信じて必死になって仕事に立ち向かい、一時たりとも無駄にしないで毎日を送っていた。

それは出産までに、仕事のめどをつけたかったからであり、出産後は初めて母親になることで、仕事を休んで十分な休養を取りたかったから。そして、余裕の中で母親として新しい命に接したいと

思っているから、マツシモの心配をよそに毎日非情な仕事の世界に生きていた…。

しかし、思いは簡単には遂げられず、焦りは日を追う毎に大きくなっていった。

その要因は半年ほど前から村の仲間に助けられながら、家の前を畑に耕し肥沃な土地にして有機野菜農園を開拓していることにあった。

もちろん、農園での収穫は家計の足しにすべく、自給自足を目的としていたが、

少しずつ農園らしさを見せる開拓地を眺めながら、

この農園を組み込んだ新しい企画を考え始めていたからである。

妊娠という想定外の出来事が重なったことで、様々な問題が起きていたから、

企画をじっくり練る時間と農園と対峙して、客観的な澪の世界を構築する余裕を

見出せないことが、焦りと苛立ちの大きな要因になっていた。

しかし、そんな逆境の中で咲江の言葉を思い出す自分がいた。

“自分を信じるのよ” そう言って和歌山の港を送り出してくれた

咲江の顔が常に脳裏に蘇り、一度も二度もへこたれて座り込んでも、澪の背中を押し、励まし続ける咲江がいた…。咲江はこうも言った。

“今は一人じゃないのよ。一人で頑張らなくてもいいのよ”

澪は苛立ちと焦りに押し潰されそうになる前に、マツシモに助けを求めた。

今考えている企画をマツシモにもいずれ報せるマイケルにも

解り易く書面で整理し、荒削りではあったがそれをマツシモに見せて協力も求めた…。マツシモの全面的な協力を得たのは言うまでもなく、

その日から改めてその試案をまとめ、中途半端でもいい、

マイケルに意見を求めるんだと言うマツシモの助言に従い、

香港へ戻って行ったマイケルに添付してメールで送った。

マイケルからはすぐには返事はなかったが、とりあえず自分に課したノルマを

果たし終えた澪は、落ち着きを取り戻し、平和な日々の中で暮らし始めた半月後、

思いもかけずメールではなく、マイケル本人がその返事を携えて、突然、澪とマツシモの前に突然やってきた。

しかも一人ではなく、ダニエラを伴ってボルツァーノにやってきたのである。

二人は声を合わせて、澪の顔を見るなり開口一番に言った。

「マツシモ、漣、おめでとう。いよいよ二世誕生だな。でも、おめでとうはそれだけではない。

社長が北イタリアでの有機栽培農園とスローフードの世界を開拓という、企画のコンセプトがすごいって賞賛したんだ。

マツシモの言う通り彼女にはこの先も会社のために働いてもらうのがベターだって社長以下、会社内で盛り上がった。

だから、漣のユートピアの世界に僕とダニエラも参加して、新企画を前に進めることになった。

つまり、社長命令で僕とダニエラはこの地に赴任することになった。社長は漣に辞められたら困るんだろう、漣をパルマに呼び寄せるんじゃないく、

僕たちが赴任すれば済むことだからって。漣はもちろんだが、農園もここから移動するわけには行かないからね。と言うわけで、この先はマツシモ夫婦の陣頭指揮の配下で僕たちはここでしばらく暮らすことになったので、よろしく！

それと落ち着いてからでいいんだが、漣の開拓したこの農園は、会社の傘下にしてもらえないかという社長の願いがあるんだけど、考えておいてほしい」

二人の喜びは天にも昇る思いであった。貧乏には耐えることができるが、

仕事の貧しさは耐えがたい漣だったから、これほどの素晴らしいニュースは

なかった。しかし、喜びの中にいる漣の傍らで考え込むマツシモの姿があった。

入院騒ぎで漣の卵巣に悪性腫瘍のあることが判明していたからである…。

誰にも言えず今日まで耐えてきたが、仕事が一区切りついたら、出産まで静かに過ごさせようと思っていたから、

澪の身体が心配だから、マイケルが持ってきた朗報に素直に喜べないマツシモの悩む姿があった…。

あの時、医師はすぐにも手術をする必要がある、と言った。

澪の命を助けたいのなら、子供はあきらめるしかないとも言われた。
・・。

二者択一を迫られたマツシモは、澪からいつも話を聞かされていた咲江に、

思い切って相談してみた。もちろん、イタリア語ではなく英語でメールを送った。

彼女が英語を理解するか否かは判らなかったが、藁をも掴む思いで密かにメールを送った。

メールの返事は一日置いた朝方、マツシモの携帯に入った。

咲江はためらわず“澪に子供を生ませてやってください。彼女なら大丈夫です。

きっと奇跡を起こしますから。いつだって自分を信じている限り、澪は自分に

勝つ子なんです。だから、ご主人のあなたも澪を信じてください。きっと大丈夫です”

という返事があった。マツシモはなんら根拠のない“大丈夫です”の言葉に不安は

隠せなかったが、咲江の“きっと奇跡を起こす子だから”という言葉葉は

マツシモの心を動かした。というのも、以前、澪も咲江と同じことを言ったことを

思い出したからだ。

「奇跡はいつだって起こるものよ。奇跡を信じるって難しいけれど、私はいつも信じると奇跡が起きるの。可笑しいでしょう？」

マッシモは漣に今子供を諦めさせる勇氣はなく、数日間思案したが、医師と相談し、胎内の子供の發育に支障がないリミット、八ヶ月で帝王切開で

出産させ、その際に卵巣の摘出も同時に行うという、苦渋の決断をした・・・。

危険な賭けと医師に言われたが、マッシモは今までの漣の生き様を知っているからこそ、漣を抱きしめたあの七月という素晴らしい季節に生まれる

我が子の誕生にすべてを賭けた。マッシモのこの先の人生も賭けた…。

この後、漣には子供が授からないことを知っているから…。

漣と出逢ったあの香港での七月を再び、二人の旅先と選びたいから…。

そして、まだ見ぬ我が子の奇跡の命が、あのパルマの茜色の空に高く舞い、

命の尊さを、尊厳を感謝してほしいから…。

マッシモは自分の先の人生のすべてを賭けて祈り続けた…。

永久の愛を愛しい漣と我が子に祈り続けた…。

【完結】

■ 最終章 ■ 奇跡に賭けて（後書き）

長い間、お読み頂きましたことを心より感謝致します。

ご感想、ご意見など頂ければ幸いです。

今後ともどうぞよろしくお願い致します。

なお、昨年9月に出版されました【あなたが生きた街】は、ご好評を頂き、

心よりうれしく、大きな励みとなっております。こちらもよろしく
お願い致します。

次回策は2日後を予定しております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0906j/>

【抱きしめた季節】

2010年10月10日10時52分発行